中等國語讀本

新修二版

卷四

4a
810
昭5

41644
教科書文庫
4
810
41-1930
20000
90664

昭和五年十月九日

文部省檢定濟

中學校國語科用

中等國語讀本

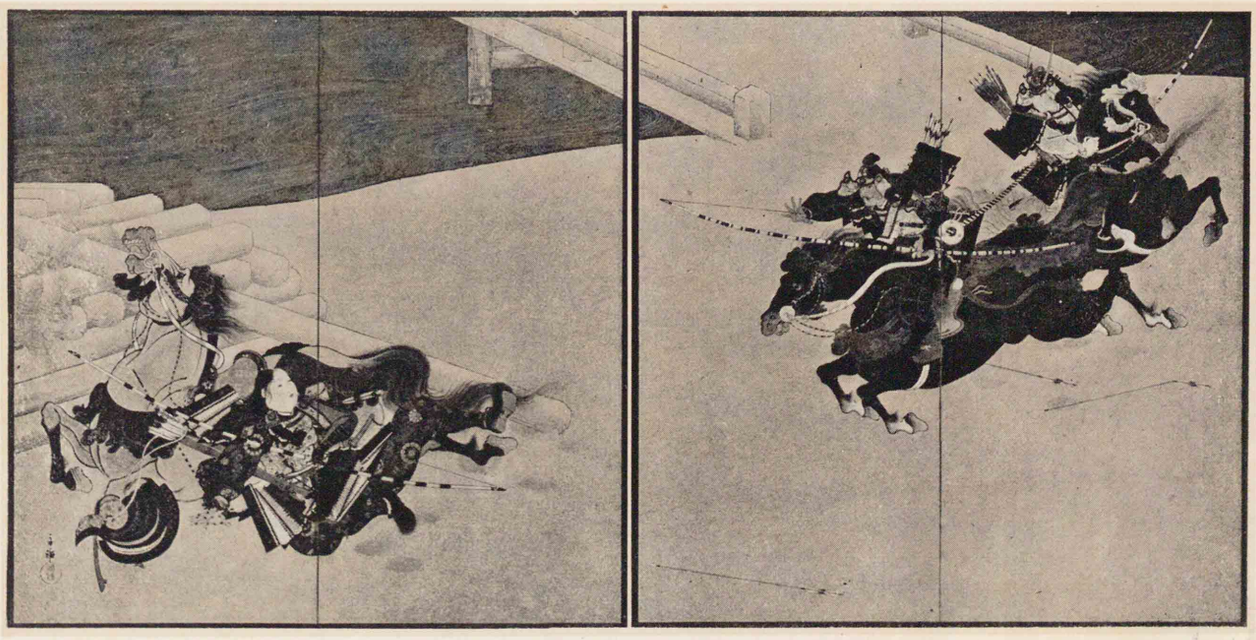
新修二版

広島大学
蔵
90664
図書

編者
落合直文
金子元臣

資料室

4a
810
AB5



重盛と義平（山川永雅筆）

一四　待賢門の戰

卷四目次

一　蟲の伶人……小泉八雲……一
一、まつむし……一
二、すずむし……三
三、はたおりむし……四
四、くつわむし……七
二　日日の實行……新渡戸稲造……一一
三　三樹三郎とその師……市島謙吉……一七
四　漱石書簡……夏目漱石……二五
一、茶碗……二五
二、自畫自讃……二六

五 建國の昔……芳賀矢一……二八
六 武士道……二四
七 大石良雄……福本日南……三九
八 閑日月（和歌）……四五
九 野のにほひ……薄田泣菫……四九
一、玉菜……四九
二、里芋……五〇
三、白菜……五三
四、栗……五四
一〇 犍陀多……芥川龍之介……五八
一一 推理の誤謬……丘淺次郎……六九
一二 落葉……永井荷風……七四

一三 甲州街道の牛に（新體詩）……尾崎喜八……七九
一四 待賢門の戰……（平治物語）……八一
一五 國史に返れ……德富蘇峯……八八
一六 祈りなほし……（吉野拾遺）……九三
一七 南京の壺……柴田鳩翁……九七
一八 笑話四則……（醒睡笑）……一〇五
一、湯漬……一〇五
二、朱槍……一〇五
三、數珠……一〇六
四、留守……一〇七
一九 自分の書物……ギッシング……一〇八
二〇 文字……佐佐政一……一一三

二一 早春のスケッチ……島崎藤村……一二〇
一、山上の春……一二〇
二、小諸の思出……一二二
二二 一系の天子（俳句）……一二六
二三 恩……島地大等……一三〇
二四 南洲遺訓……西郷南洲……一三四
二五 松下村塾を訪ふ……下村海南……一三七
二六 修善寺だより……尾崎紅葉……一四四
二七 春宵……夏目漱石……一四八
二八 坦庵と象山……坪内逍遙……一五五
（附錄）字音假名遣一覽
（終）

中等國語讀本 新修二版 卷四

一 蟲の伶人

一、まつむし

表意文字で書くと、この蟲の名は「松蟲」であるが、發音の上から見ると「待つ」といふ動詞と、「松」といふ名詞と同じ音だから「待つ蟲」といふ意味にもなる。まつむしを詠んだ日本の詩の大多數の基礎をなして居るのは、主として發音の上の二重の意味である。その用例には少くとも第十世紀へは

松蟲

棲んで（棲みて）

古今集　我が國にて最初の敕撰集。醍醐天皇の勅を奉じ、紀貫之等これを撰して延喜五年に上る。あきの野に云云　古今集、秋上、讀人知らずの歌。

溯れる頗る古いものもある。

松蟲はその音色が殊に清らかで麗しいから、大いに尊重せられて居る。小さい銀のやうな鋭い音のする電鈴を遠くで聞くに似て居るといつたが、一番好いやうに自分は思ふ。松林や杉の森に棲んでゐて、夜間その音樂を奏する。濃い鳶色の背をして、黄ばんだ腹をした甚だ小さい蟲である。

松蟲を詠んだ一番古い歌で現存して居るのは、多分古今集に載つて居るものであらう。この蟲の名前の發音の上に、前述の戯を、我我はこの歌集に初めて認める。

秋の野に道もまどひぬまつ蟲の
聲するかたに宿やからまし。

すずむし

二、すずむし

この名は「鈴の蟲」といふ意味だ。然し、かくその音を指示して居る鈴は、頗る小さな鈴か、又は神道の巫子が神聖な舞に使用するやうな、小さな鈴の一束になつて居るのである。鈴蟲は蟲類愛好者に非常に愛せられて居る。夜間ある寂しい處でその蟲の群が立てる音は、つい早瀬の音と思ひ誤る位だ。日本人がこの蟲の形を、黑に種類の西瓜の種に似て居ると述べて居るのは旨い形容である。非常に小さな蟲で、背は黑く、腹は白いか黄味を帶びて居るかだ。日本人はその音を形容して「リイイイイン」だという

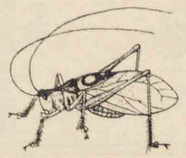
小泉八雲

て居る。ふるい歌に、

心もて草のやどりをいとへども
なほ鈴蟲のこゑぞ舊りせぬ。

心もて二六二六源氏物語鈴蟲の卷に出づ。

三、はたおりむし



はたおり

はたおりむしは、非常に優しい形をした、冴えた綠色の美しい螽蟖である。機を織るもの」といふ意味の、この妙な名に對して、二つの理由が與へられて居る。一つは、ある特別な持ちやうをして支へて居ると、そのもがく身振が、機織娘の擧動に似て居るといふのである。も一つの理由は、この蟲の奏する音樂が、手織機で物を織つて居る折の筬と梭の音を眞似して居るやうに思へるといふのである。

死んで（死にて）

はたおりと、きりぎりすとの素性に就いて、昔日本で子供等に話して聞かせてゐた面白い民間傳說がある。その話によると、ずつとずつとの昔に、手仕事をして盲目の老父を扶養して居た、非常に親孝行な娘が二人居た。姉娘は織物をし、妹娘は縫物をして居た。その盲目な老父がとうとう死ぬると、この善良な二人の娘は非常に歎き悲しんで、これも亦間も無く死んでしまつた。すると、ある晴れた天氣のよい朝、今まで見たことのない動物が、この姉妹の墓石の上で音樂をやつて居るのが見付かつた。姉の墓石の上には、娘の子が機を織る時にするやうな音、「ヂイイイ、チョンチョン。ヂイイイ、チョンチョン」といふ音を立てて、綠色の可愛いい蟲が居た。

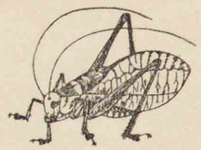
こほろぎ

これが最初のはたおりむしであつた。妹の墓石の上には、襤褸させ、襤褸させ。――つづれ、つづれ――させ、させ、させ」と叫び續けて居る蟲が居た。これが最初のきりぎりすであつた。そこで、誰もその善心な姉妹の魂がその姿になつたのだと知つた。今でも秋毎にこの二つの蟲は、世の人妻や娘子に上手に機を織れよと叫び、寒さの來ぬ中に一家の冬衣を繕へよと警めるのである。

はたおりに就いて自分が手に入れる事の出來た歌は、ちよつと面白い空想といつただけのものである。

秋くればはたおる蟲のあるなべに
唐にしきにもみゆる野邊かな。

秋くれば云云
拾遺集中の歌、貫之の作。


くつわむし

四、くつわむし

この蟲には數數の變種がある。擬音聲的に「ガチャガチャ」と呼ばれて居る。字書に「やかましく啼く一種の螽蟖」とあるのは忌忌しいことだ。くつわむしは捕りにくいが、飼ふのは易い。つくづくぼふしが太陽を愛する蟬類のうちで一番驚歎すべき樂師であるが如くに、くつわむしは夜の樂師のうちで最も驚歎すべきものである。轡蟲といふ意味のその名は、その音が日本の昔風の轡を「チャリンチャリン」鳴らす音に似て居るから來て居る。然しその

蟲賣

音は實際はくつわ一箇の「チャリン、チャリン」よりははるか聲高で、はるか複雜なものである。卽ちこの比喩が精確か否かは、この蟲が諸君のそばで盛に啼いて居る最中には、容易に識別の出來ないものである。自分みづからの眼でもつて實際に見なくては、こんな生物があんな素敵な音を出し得るとは信じ難からう。確かにこの音の振動は非常に複雜なものに相違無い。その音は湯氣を洩らす時のやうな「ヒュー」といふ鋭い微かな音で始まる。そして徐徐に强まる。それからその「ヒュー」へ突然に四つ竹の音のやうな、迅速なはしやいだ「カタカタ」いふ音が加はる。それから全機關が突進して運轉を始めると、その「ヒュー」と「カタカタ」との上に、銅鑼を敲

啼いて（啼きて）

くやうな急速な「ヂャン、ヂャン」といふ音が、さつと流れてくるのが聞える。この最後に始まる音が最初にやまる。それから四つ竹の音がやまり、最後に「ヒュー」といふ音が消える。だがこの完全な合奏は一やすみも無しに、一度に數時間演奏を續けて居ることがある。夜遠くから聞いて居ると、その音は愉快である。そして實際いかにも轡の「チャリン、チャリン」いふ音に似て居るので、「人の通へぬ道に、靈的な護送の曲を奏して居るのだ」と昔から稱へられて居る。この蟲の名に、如何に多くの眞の詩美が存して居るか、それを感ぜずには居られぬ程である。

くつわ蟲ゆらゆら思へ秋の野の

くつわ蟲の歌　曾根好忠の歌。曾丹集に出づ。

小泉八雲
英國人。本名ラフカヂオ、ヘルン。我が國に歸化す。東京帝國大學教授。明治三十七年九月歿す。（二五一〇年―二五六四年）

やぶのすみかはながき宿かは。

（小泉八雲原著、大谷繞石譯――蟲の文學）

戸部は物に腰かけて打刀を横たへておはします。「ただ今蘆澤某を手づから誅すべし。それに侍へ」と宣ふ。答へ申すこともなくてあるに「思ふ所やある」と仰せらる。「さん候ふ。天性不敵なる者の、しかも年若くして鳴滸の振舞多く候へば、いかなる奇怪を仕出して候ひぬらむ。但かれが如き者ならずしては、年闌け候はむ後に物の用には立たぬものに候ふ」と申すに、又宣ひ出すこともなく、我も亦申すこともなくして候ふ。稍ありて面に蚊の集まりぬるに「逐ふべし」と宣へば顔を動かすほどに、血に飽きて胡頽子の如くになれる蚊の、六つ七つはらはらと地に墜ちけるを、懷の紙を取り出して包みて袖にして候ふ。

（新井白石）

負うて（負ひて）

二　日日の實行

継續は困難である。凡人に困難なるのみならず、古來の英雄さへもこれを難しとして居る。

新渡戸稲造

徳川家康の遺訓に「人の一生は、重荷を負うて遠きに行くが如し」とある。重荷を負ふことは大いなる苦しみである。それも、一時一寸負うて濟むなら、大概の人人にも出來るが、重荷を負うたまま遠きに行くは頗る苦しい。それを繰り返し繰り返しやるのが継續であつて、難儀はここにあると思ふ。家康の如き英雄さへも、継續の困

難と必要とを認めて、切實にこれを說かれたのである。

怠らず行かば千里の外も見む

牛のあゆみのよし遲くとも。

といふ古歌の示す如く、牛歩的に遲くとも宜い。怠らず一歩一歩と進み行けば、やがて千里の遠きにも達するのは必然である。ゲーテの言葉にも、「急がず息まず」とある。然し、人はとかく少しの障害にでも逢ふと、直に目的を變へてしまふ。最後まで辛抱してやり遂げようといふ決心に乏しい。

例へば、小さな罌粟粒のやうな種子を、何倍も何十倍もある程な土塊のなかに埋めて置く。雨を受け、暖かい氣候に會うて、種子は發芽する。發した芽は卽ち發心で、これがこの厚

ゲーテ　日耳曼の詩人。戲曲家。シェクスピヤ以來の大詩人と稱せらる。Göthe（西暦一七四九年―一八三二年）

い大きな土塊を過ぎて地表に出て、成長し結實するのが卽ち繼續である。この繼續の間にも、少し荒い風でも吹けば、漸く發した軟かい芽は忽ち挫かれてしまふ。それと同じく、善を爲さうと發心すると、何時しか他方に魔がさして來て、善をさせまいと妨げ、折角發心したこともバタツと倒されてしまふので、繼續といふことは非常に難事となる。

然し大事をなすには、この繼續心がなければならぬ。春の野に數知れず芽を出す若菜も、秋になつて實を結ぶものは少い。如何なる手腕技倆あるものでも、最初の決心を繼續して行ふものでなければ、決してその事に成功しない。

昔孟子は稍長じて家を出でて、先生の許で學問を勉强し

喜んで（喜びて）

學んで（學びて）

て居つた。然るに、いまだ成業しないのに、飄然として家に歸つた。折しも、機を織りかけて居た孟母は、わが子の歸つて來たのを見て、喜んで「もう學問は成業しましたか」と問うた時、孟子は「いな、いまだ十分には」と答へた。この瞬間、孟母は顏色を變へ、突然起つて剪刀を取り、織りかけて居た機を眞中から眞二つに斷ち切つた。孟子はこの有樣に驚いて、「何故にかかることを爲し給ふか」と問うたら、母は、「汝が今中途で學問を廢して家に歸るのは、母が今この機を斷ち切つたと同樣である。汝も聞いたであらう、『君子は學んで名を立て、問うて知を廣む。故に居れば卽ち安く、動けば卽ち害に遠ざかる』といふことを。今汝が中途で學問をやめるのは、これ終身厠役

織つて（織りて）

あつても（ありても）

を免れぬものである。この母も汝の腑甲斐なき有樣を見て殘念であると、涙を流して說き聞かせたといふ。

僕はこの談話が大好きである。綺麗に織つて文をなすべきものを、途中で斷つてしまへば何物にもならぬ。

青年が志を立てるのは、經絲を調ふると同じで、人生の何處から何處までを、如何なる文に織り成すかといふ方針を定めるのである。但經絲だけでは織物は出來ぬ。橫絲があつて經絲と交はつて、始めて錦繡の美をなす。只一本づつの橫絲であるが、日日これを織つて行けば、やがて立派な織物となつて綾が出來る。立志はあつても、毎日撓みなく繼續して行かなければ物にならぬ。經絲と橫絲とあつて織物が出來、

立志と日日の實行とがあつて、始めて目的を貫くことが出來る。

日本人は元來物に飽きやすい國民である。故にある事に出逢うたなら、最後までこれを繼續すると決心し、且これを力行するやうに修行しなければならぬ。（新渡戸稲造――修養）

新渡戸稲造　農學博士、法學博士。貴族院議員、岩手縣の人。文久三年生まる。

我を無極に繫ぐものは明日なり。十年も百年も千年も、萬年も億萬年も千億萬年も、總べて明日の積なるを知らずや。人生蜉蝣の如し。但明日の觀念は人に永遠の生命を與ふ。我をして待つあるの宏懷を有せしむ。人間の罪惡、百中の九十七八は明日の觀念なきより生ず。「あすあると思ふ心のあだ櫻よはに嵐の吹かぬものかは。」これ醉生夢死の徒に向つて鐵鉞を下したる警句。「朝に道を聞き夕べに死すとも可なり」の大眞理を反面より說明したる深語なり。（德富蘇峯）

枕頭　ほとり
原
鬼＝人の死んだ魂
籍　過去帳
時の助動詞
文語口語
（四、未）
（真実の動詞の未然形）

三　三樹三郎とその師

賴山陽　名は襄、字は子成。春水の子。天保三年九月歿す。（一二四四〇年―一二四九二年）

下賀茂　京都府下愛宕郡。

川上儀左衛門　名は順。字は君嶂。東山と號す。天保十一年八月歿す。（一二五〇〇年）

賴山陽が歿した時には、三樹三郎は八歳の小兒であつた。山陽は常から三樹三郎の將來を深く心配してゐたので、病危篤に陷るや、枕頭に細君を呼び寄せて、「もう自分も遠からず鬼籍に入ると思ふが、敢へて何の心配もない。然し唯一つ三樹三郎のことが心に懸かる。自分の死後、彼が如き腕白小僧は、恐らく誰の手にも終へぬであらう。それに就いて考へたのであるが、あれを一人前の者にしてくれようといふものは、下賀茂の川上儀左衛門より外にはないだが、この人は一通りの賴みやうでは、容易に承知してくれさうもない。そ

浦上春琴
京都の畫家。名は選、字は伯擧。又詩文及び書を善くす。弘化三年五月歿す。（一四三八年―一五〇六年）

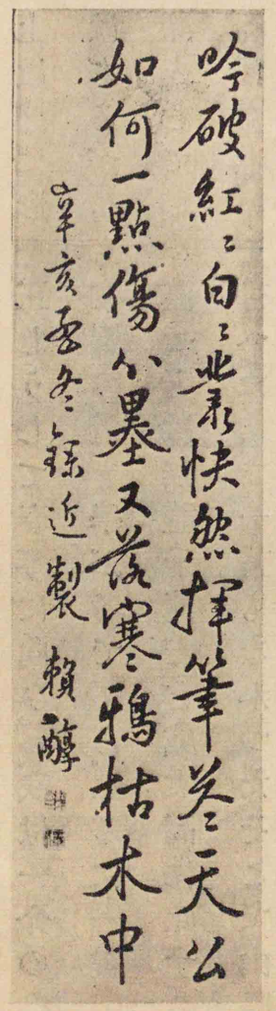
こは賴み方一つだから、自分の死後、遺骸は門人に託して置いて、直に其方は三樹三郎を引き連れ、川上を訪ふがよい。さうして、『今日夫が死去しまして御座る。就いてはこの悴を何卒御敎導願ひます。夫が臨終に是非川上先生へ願へと申しましたから』と心から泣き付いて賴みなさい。さうしたら或は承諾するかも知れぬ」と、窃かに細君に遺命して置いた。

何故山陽がこの川上といふ人に依賴するのに、これ程の斟酌を要したかといふと、それには深い事情がある。それは山陽が京都に門戸を開いて居ると、旗本で百石取位の川上某といふ人の次男で、後に東山と號した川上儀左衞門が入門して來た。その頃山陽と懇意であつた畫家の浦上春琴が

山紫水明處
山陽の家の號。

吟破紅紅白白、叢、快然揮レ筆答二天公一、如何一點傷心墨、又落寒鴉枯木中。
辛亥孟冬錄二近製一　賴醇

訪ねて來て、山陽と山紫水明處に對酌して居たが、その席から頻に手を鳴らす音が聞えるので、常ならば下婢が用を聞くべき所を、折惡しく誰も居合はせなかつた爲に、川上が氣を利かせて用を聞きに行くと、客の春琴が德利を持つて、「燗



賴三樹三郎筆

が冷たくなつたから直してくれ」と命じた。處が川上はこれを耳にも入れず、再び「何の御用か」と聞くので、春琴は又、「燗を直して來い」というて、その德利を前へ出した。すると川上は

正しう（正しく）

憤然として、德利を奪ひ取るや否や、春琴目がけて投げ附けたから堪らない。血は流れる、酒は迸るといふ有樣に、山陽も客の手前、聲荒らげて川上を制したところが、制せられた川上は遽に形を正しうして春琴に向ひ、「我我は一介の書生ではあるが、苟も聖賢の道を學ぶ者である。然るに一畫工の分際として、燗を直せとは無禮千萬だ」と威丈高に叱するので、春琴も唯傷を抑へたまま一言もなかつた。そこで山陽は、「長者に對して貴公こそ無禮だ。下りなさい」と叱りつけると、川上は今度は山陽に對し、「先生の御言葉ではあるが、吾吾はかやうな畫工輩から命令を受ける覺はない。無禮の奴を懲らしめの爲に致したことを、御咎めなさるなら據ない」と袂を

猪飼敬所　京都の儒者。名は彥博、字は文卿。弘化三年十一月歿す。（一二五〇六年）

丁亥小春月春琴居士寫

缺いて（缺きて）

拂つてさつさと退塾してしまつた。

それから川上は、當時經學者として鳴つてゐた猪飼敬所の門に入り、山陽の向を張らうといふ一心で、日夜刻苦精勵したから、忽ち同塾中の秀才と目されたが、程なく下賀茂に

浦上春琴筆

塾を開き、山陽に對抗して塾生の收容に努めたので、兩者の間は自然圓滿を缺いて居たのである。然るにかうした因緣のある川上に、その子を託するといふ山陽の決意は、よほど感情を脫却して、三樹三郎の前途を憂へた結果であると認めねばならぬ。

山陽はこの遺言をした翌日、遂にこの世を去つた。そこで細君は夫の死骸も始末せぬ先に、萬事を抛つて三樹三郎の手を引き、一里程ある下賀茂の川上の玄關に至つて案内を乞ふと、平生犬猿も啻ならぬ間柄とて、「頼の家内なら用はない筈、お目にはかからぬ」と拒絶した。然し細君が、「いや、ただ一言申し上げたいことがあるから」と強ひて申し込んだので、漸く面會したものの、川上は相變らず、「何の御用で御出か」と、横を向いて冷淡な挨拶に、一時は取り附く島もない樣子であつたが、細君はここぞと忍耐して、「別儀でも御座いません。夫は唯今歿しましたが、その間際に、『この悴は到底誰に頼んでも教育は出來ないが、唯一人この人ならばと思はれるのは川上氏である。一旦は師弟の好誼もあつたこと故、すべてを川上氏に御頼み申せ』と遺言がありました。從來の事は、夫の死によつて一切を水に流し、何卒悴を御頼み申したい」と涙とともに頼み入つた。これを聞いて、川上は暫く默考して居たが、「ああ、先生はこの儀左衞門を知つて居てくれられたと見える。頼まれて見れば早速承知致しませう」と卽座に快諾した上、「後はどうなさつた」と問うた。細君が「その儘に捨て置いて參りました」と答へると、川上は一層感に打たれたと見えて、「それならば私も參つて御世話致しませう」と、直に細君と同道して出かけ、萬事の世話が濟むと、三樹三郎を連れ歸つて、十六歳まで懇切に教授をしてくれた。されば三樹三

抛つて（抛ちて）

耶は川上の歿後もこの恩を忘れず、毎月賀茂の川上の墓へ香華を手向けたといふ事である。（市島謙吉――隨筆賴山陽）

市島謙吉　新潟縣の人。春城と號す。早稲田大學名譽維持員。萬延元年生まる。

賴家で非常に面白く感じたものは、山陽夫人梨影が山陽の論孟の講義を傍聽して假名で書きとめたものである「論孟加奈書」と題し、傍に「母上樣御手書」と書いた袋に入れてあつて、この上書は支峯が若い時分の筆である。言文一致體の筆記で、その筆迹は山陽の母堂の梅颸のやうに巧みではないが、いかにも達者に出來てゐた。子供の質問を受けて、知らぬとあつては申し譯がないと、丹誠をこめたその心掛があり〳〵と見えて、賴家にとつては頗る大切なものである。また山陽の書いた「日本國盡」の手本があつた。これは三樹に書いてやつたものと見えて、「子春」の印がぽつぽつ捺してある。三樹の惡戯であらうが、中に人形などが書いてあつたり、又むづかしい處などは、じれつたがつて墨を塗つた處も見えたりして頗る面白い。（市島春城）

四　漱石書簡

一、茶碗

道草　漱石作の小說。

貰つて（貰ひて）

拜啓。「道草」の御禮に茶碗などを貰つて濟みません。然し貰へば結構です。有りがたく御禮を申します。あの茶碗は肌合が非常に滑かで美しいもので、それに模樣と恰好とがよく調和して、何方かといふと女性的な粹な所のあるものです。僕があれで食ふと少少不釣合だ。客が來た時、飯碗に使ひます。多謝多謝。金が無いのに、無闇に品物などを送る心配はしない方がよろしいと思ふ。けれども此方は貰へば嬉しいんだから、やはり使つた

嬉しいんだ（嬉しいのだ）

金は活きる譯には違ない。ただ君と僕との富力からいつて、僕は君から一品の贈與を受けるべき地位に立つてゐない。僕の方から君に物を遣るべきだらうと思ふ。好意は感謝するが、これから餘りこんな所に金を使つて心配しないがよろしい。以上。

二、自畫自讃

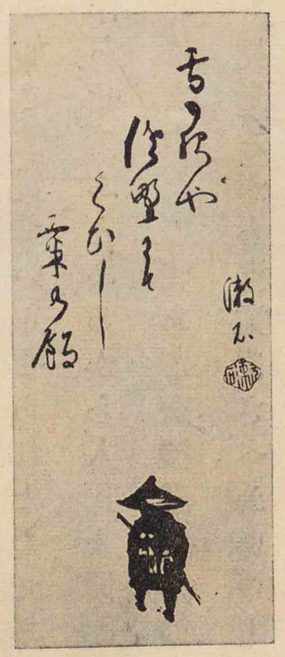
拜啓。昨日はわざわざ御斷りの手紙を差上げ候處、今日午前に至り、ふと自畫自讃試みたく相成り、生まれて初めて畫をかき候。然るところ、我ながら見上げた出來ばえにこれあり、大いに喜び、この手紙と同便にて差出し候間、御受け取り願ひ候。繪は最明寺殿が後向になつてあるいてゐる所と御承知下されたく候。斜に出てゐるものは杖にて、決して刀にはこれなく、家人は侍が帶劍の姿と間違へ候間、念のため説明を加へ置き候。最後の間へ御懸け下さるに及ばず、裝飾品としては、そのうち書畫ともに上達の見込あれば、うまくなつた時改めて立派なものを御覽に入るる覺悟に候。以上。

（夏目漱石——漱石全集）

最明寺殿　北條時頼をいふ。

雪の夜や佐野にて〳〵ひし粟の飯　漱石

夏目漱石　文學者。名は金之助。東京の人。東京帝國大學講師、朝日新聞社員たりき。大正五年十月歿す。（一八六七年—一九一六年）



漱石自畫讃

に申し上げ候、これはほんの記念として差上ぐるもの故、決して表裝の上、床

聖人の御德

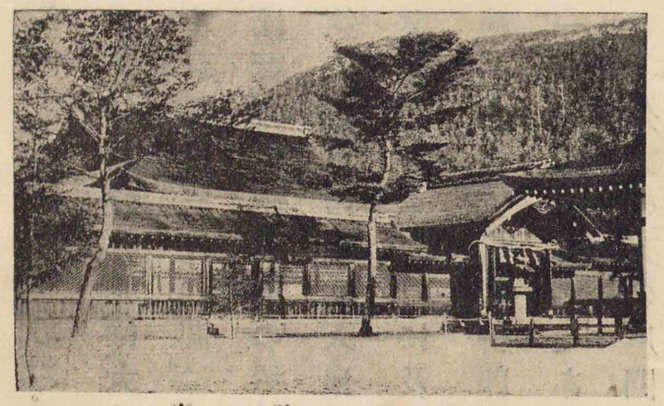
國かなることは言はず見えない通じない知らない いい人 なりけり

入つて（入りて）

五　建國の昔

古典によつて皇祖天照大神の御事蹟を察するに、聰明睿智にして極めて御德が高かつたのである。さうして、溫柔玉の如き性質でいらせられたのである。躬ら天の長田、狹田を作らせ給ふとあるから、人民と同じく、耕穡の業にさへお盡しになつたのである。齋機殿に入つて機を織らせられた事も見えるから、機業にさへおいそしみになつたのである。尊貴の御身を以て、かく下民と同じく農工業をも親らせられたのである。又かの新嘗をお營みになつたのを見ても、如何に下民の勞苦に御同情遊ばされ、且下民の幸福に懸念せさ

せられたかが窺はれる。御弟の素盞嗚尊の亂暴をあくまでも忍耐遊ばされ、寬恕遊ばされたことを見ても、その美しい御性質は拜察せられる。しかし素盞嗚尊が天上に上り來ますと聞かせられて、男裝して弓矢を手挾み、「國を奪ふ黑き心あらば許さじ」と決心遊ばされた雄雄しさに、十分な御勇氣も見えるのである。これらを綜合して考へれば、大神は實に我が日本國民の理想とも見るべき大神であらせられたのである。溫和で、勤勉で、一



橿原神宮

大事變に際しては、毅然たる勇武、一歩も退かない氣性があらせられたのである。

皇孫瓊瓊杵尊は、大神の命によつて我が國に降臨せられ、それから三代の間は筑紫に都せられたので、我が日本帝國は實に瓊瓊杵尊の治下に始まつたのである。瓊瓊杵尊から第四代目の神武天皇に至つて、始めて大和國に都せられて、皇威が廣く四方に及んだので、この天皇からを人皇の世と稱し、この天皇の御卽位の禮を擧げられた年を我が紀元第一年と數へるのである。昔の人の歌に、瓊瓊杵尊をば、

久方の天の戸開き、高千穗の峯に天降りしすべらぎ。

といひ、神武天皇をば、

久方の天の戸云云　萬葉集、卷二十、大伴家持の喩族歌の中の句。

秋津洲大和の國の橿原の畝火の宮に、宮柱太知り立てて、天の下知ろしめしけるすべらぎ。

と稱へて居る。同じくすべらぎと申し上げて居るのを見ても、我が國が瓊瓊杵尊に始まつて居ることを知らねばならぬ。

秋津洲云云　同上。

建國創業の君であらせられた瓊瓊杵尊にしても、神武天皇にしても、常に天照大神の御敎を守つて、その聖德を以て人民を感化せられたことは、古典に考へて知られるのである。外國の歷史に見えるやうに、單に武力一片で、暴壓的に服從せしめたのではなかつたのである。不逞の徒で、皇師に逆らふ者はあつた。それを古典には、「まつろはぬもの」といつて

守つて（守りて）

ゐる。そのまつろはぬものを平定せられることを「やはす」といつてゐる。やはすは和かにすることで、これまで頑強に我意を張つて敕命を奉じなかつた者の心を和げて、心底から歸順せしむるのである。又「ことむく」といふ語もある。ことむくは言を以て諭して、從來他の方面に向つてゐた者を、こちらへ向かせることである。これらの語を考へて見ても、我が創業の君が如何に仁慈を以て、德望を以て、不逞の徒をも慰撫し、心服せしめられたかが察せられるので、決して無理に力ばかりで抑へられたのではない。これが卽ち大神の大御心で、列聖は常にこの大御心を御繼承遊ばされてきたのである。

支那には御民といふ語もあり、牧民といふ語もある。これは人民を馬や牛に譬へたのである。君主專制の意味が、この語の上にも歷然としてゐる。我が國には決してかういふ語は無い。

すべらぎはすべてを統べる義で、すべらぎ卽ち天皇が國を治め給ふことを、「御世知ろしめす」といふ。知ろしめすは、お知りなさるといふ意味である。よく下民の事情を知るといふことである。かく下情に通じて始めて仁慈の政が行はれるのである。まつろはぬ者に對しては、これをやはし、これをことむけ、さて人民をばおしなべて知ろしめしたのである。

（芳賀矢一）

六　武士道

武士道は、或點に於いて自我の觀念を沒却するが故に、一部の人士の非難を免れざれども、まづ大體について云へば、日本固有の美點を發揮し、國民精神の特長を示現せるものとして、世界に對して誇るべきものとなさざるべからず。

上古の世、我が國民の間に發達せしは尙武の氣風なりき。物部、大伴の二氏は、弓矢を執りて皇室を護衞するを世職とし、子孫に武事を傳へ習はしめ、心膽を練り、氣節を磨かしめて、かりそめにも家名を墜すことなからしめんことを敎へたり。文明の空氣は次第にその習性を菲薄ならしめ、平安朝の末期、京師に於いては武人すら剛毅の風を失ひたりき。

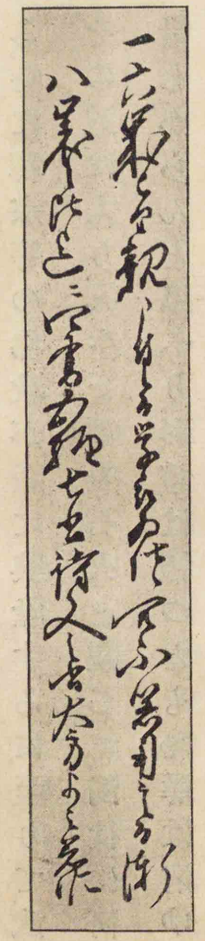
武家執政の世となりては、將軍、執權をはじめ、大名、小名その一族子弟を勵ますに、皆この意を以てしければ、武人の特性愈發達して、ここに所謂武士道の、その體を具へたるを見る。特に禪宗等の佛敎が新に興隆するに至りて、武人も多くその道に入り、人生を電光石火と觀じて、濁世に何の名殘か惜しからんと思へり。形體は朽つとも恥辱は消ゆる時なし。されば身命ここに滅ぶとも、弓矢取の本意は死を善道に守り、名を義路に失はじとこそ勵むべけれ。これ彼等が信念なりき。

武士道は鎌倉時代の陶冶を經、戰國時代に至りては益發

山鹿素行
軍學者。名は高祐。會津の人。貞享二年九月歿す。(一二八二年—一二三四五年)

一、六歳より親申付候而學被爲仕候へ共不器用に候而漸八歳の比迄に四書五經七書詩文の書大方よみ覺候

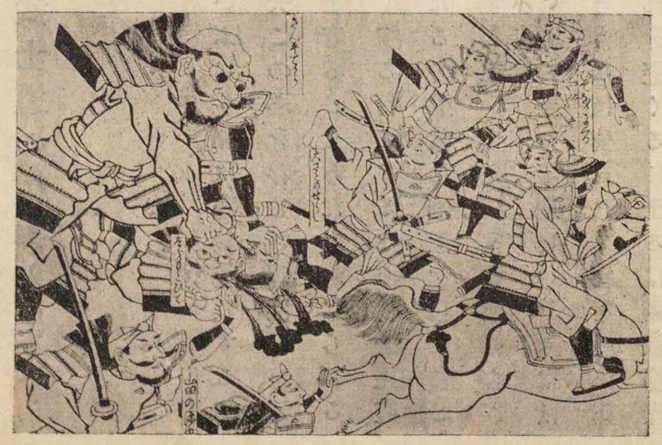
達し、德川氏の世に至りて完成せられぬ。山鹿素行が「水精の瓶に秋の水を湛へ、白玉の盆に氷を載せたらん如く、聊かも隱れたるところなき風情が大丈夫の態度」といへるは、信にその精神を說明し得たるものなるべし。その要素とする所


山鹿素行筆

およそ三あり。一に武勇を尙び、然諾を重んずること、二に義理の許す範圍において人情を尙ぶこと、三に淸廉を旨として財利を輕んずることなり。

殊に武士は、利慾に迷ひて意志を枉ぐるを卑怯の極とし、

前に千金を積むともこれが爲に初一念を飜さざらんと期す。されば、已むを得ざることありて金銀を借るとも、無形の名譽を質として、敢て有形の物品を典せず。天正中には、武士の借用證文に、「若しこの金子相濟み申さず候はば、我等、人にてこれあるまじく云云」とあり。この氣風は、おのづから町家に移りて、商人の借用證文にすらこの種の言葉を見るに至れり。これ等の氣風は今日なほ傳はりて、度度の戰役にその極


金平本挿畫

度の發現を見る。わが國が外國と戰ひて勝つことを得しは、主として國民の忠君愛國の誠と、武士道の精神とによるといふべし。（日本風俗史による）

剛はよく剛毅にして物に屈せざるをいふなり。操は我が義とする志を守つて少しも變せざる心なり。大丈夫この心を存せざれば、我が好惡する所において必ず屈しやすく、義を守るところたしかならざるなり。故に剛操を以て信を立て義を堅くする行とするなり。清廉正直も剛操を以てせざれば立たず。況や士たるの道、常に剛毅を以て質とし、その守る所を變せざるを以て行とす。人誰か生死利害好惡あらざらんや。内に剛操を以て究理するが故に、死の至つて惡むべきもなほ安んじて死に就き、害の至つて避くべきもなほ安んじて害を受く。財寶の必ず好むべきも、なほ安んじてこれを避くるに至るは、剛毅節操を高く守るにあらずば誰かこの行をなさんや。（山鹿素行）

内藏助　大石良雄。（一三一九年―一三三六三年）

内匠頭長矩　淺野氏。播州赤穗の城主。（一三二七年―一三三六一年）

様に依つて胡蘆を畫く　宋の大祖の翰林學士を評せし語。

七　大石良雄

内藏助は十九歳にして出仕してから内匠頭長矩に事へ、所謂城代家老として概ね赤穗に在住した。それで藩政の大事はこの人の預り聽くべき所であるが、世は昌平の眞最中である。一切のことは、様に依つて胡蘆を畫くに過ぎない時代で、仕置家老が多くは事を專決した。殊に内藏助はその性恬淡にして、みづから用ゐぬ人であつて、あまり政務にも關はらぬのみならず、君侯の前に出てもその才智を振りまはさなかつたから、内匠頭もさほどの人物とも思はれず、却つて吏務に長じた當世向の仕置家老大野九郎兵衛などの方

佩弦齋　青山延光。水戸藩の儒者。四十七士傳を作る。（一四六七年―一五三〇年）

五井蘭洲　名は純貞。大阪の儒者。（一三三五年―一四二二年）

君子有盛德云云　史記老子傳に出づ。

が、萬事に幅をきかして居た。佩弦齋は、五井蘭洲の瑣語に由つてこの人を敍し、「常に韜晦して露はさず。人皆斥けて癡と爲す」といつた。韜晦して露はさずとは囘護の筆で、內藏助は殊更に韜晦して居たのでも何でもない。その實は天性のまで、不必要な場合に悧巧めかさうとも何ともしなかつたのみである。が、人皆斥けて癡と爲すといふ一事はその通りであつたらしい。當時誰いふともなく、晝行燈といふ綽名をこの人に附けた。晝行燈、とは狀し得て極妙である。居常ぼんやりとして、白晝の行燈の火を看るやうな有樣が、今から囘想されるのである。「君子有盛德、而容貌如愚」の聖語は、內藏助に於いてこれを見るといはなければならぬ。顧ふに、晝行燈

リンカーン　北米合衆國第十六代の大統領。ケンタッキー州の農家に生まる。（西暦一八〇九年―一八六五年）　Abraham Lincoln

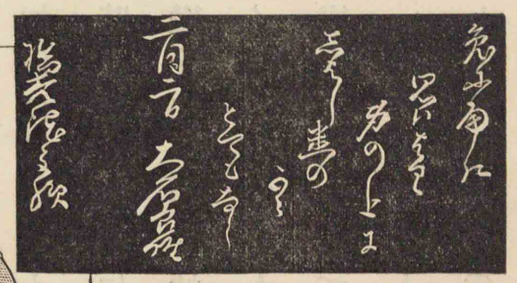
鳩巢　室氏。名は直淸。幕府の儒官。（一三一八年―一三九四年）

の綽名をば、內藏助みづから微笑して甘受して居たに相違ない。

さりながら、リンカーンもいつた通り、人は或時と或場合には欺かれるが、長き時と廣き場合には欺かれぬ。內藏助が如何に恬淡でも、謙讓でも、天分の斤量は長き歲月の間に、何時となく自然に見はれる。彼が一代の英雄であつたのは、事變後に至つて始めて知れたけれど、とにもかくにも、何となく偉い、何處にか信賴すべき所のある人だといふことは、事變を待たずして、既に赤穗の上下に信孚されて居つたらしい。鳩巢がこの人を傳して、「良雄人となり簡靜にして威望あり。甚だ國人の爲に倚重せらる」といつたのは、簡にして最も

兎に角に思は
はるゝ身の上
にしばし迷の
雲とてもなし
二月二日　大石良雄
瑞光院主樣

水谷勝美
（一二三五三年）



大石良雄及びその筆

要を得て居ると思ふ。

事變に先だつこと八年前、元祿六年の十月に、備中松山五萬石の城主水谷出羽守勝美が俄に卒し、十一月に至り、その養子勝清も亦續いて歿したので、一族郎黨相議して、幕府に向つて出羽守の弟に家督相續の事を願ひ出た。されど家主卒後の養子を免さぬのは當時の法則であるから、終に聞き屆けられず、十二月にその領地を沒收された。尤も祖先の功勞を思し召され、そ

賜うた（賜ひたり）

の弟には更めて新知三千石を賜はられた。この際、幕廷からは御目付役二人をさし遣はされ、淺野内匠頭長矩には特に收城使を仰せ付けられた。そこで翌七年二月、内匠頭は一隊を引率して發向され、内藏助も隨行した。さて松山に達して、内藏助は水谷の家老に會見し、樽俎折衝その宜しきを得て、無事に城地を開け渡させた。これが頗る當時の風評に上つた。常に淵默はして居るが、しかし赤穗には大石内藏助といふ一英物が居るといふことは、この頃から眼

大石良雄筆

ある者は看取して居つたらしい。幕府が赤穗の城地公收に近傍諸藩の兵を繰り出させたのも、吉良、上杉の兩家が非常の警戒を加へたのも、この邊の消息を探知して居つたのがその一因であらうと察せられる。さも無ければ、一箇のぼんやりの「畫行燈」を、さばかり氣にする必要も無いのである。

（福本日南――元祿快擧眞相錄）

福本日南　著述家。衆議院議員。福岡縣の人。名は誠。大正十年九月歿す。（一二五一七年―一二五八一年）

大石良雄が胸に大事を包んで、愈京を去らうとする時、或人に宛てた手紙がある。その末に「不宜候得共牡丹二三種御元へ御引取可被下候。明後日頃からにても勝手に御人可被遣候」とある。畫行燈の異名の持主は將に來たらんとする震天の壯擧を前にして、あの華麗な豐葩に飽かず眺め入る胸中の閑をもつてゐたのである。（雜誌國本による）

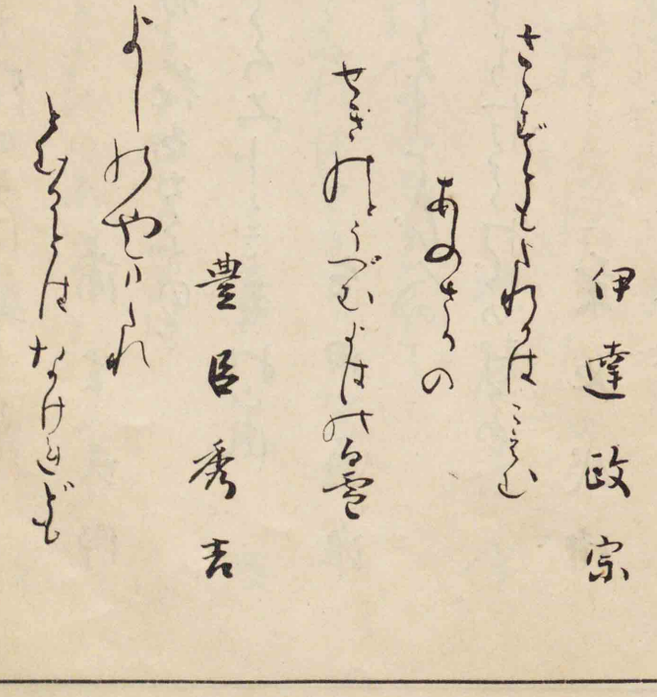
八　閑日月

伊達政宗筆

伊達政宗　仙臺の城主。寛永十年歿す。（一二二四年―一二九三年）

寒山鐘似ニ與レ愁ハタリ約スルニ夢到ニ官船ニ別ニ客船ニ。

豐臣秀吉　（一一九六年―一二五八年）



伊達政宗

豐臣秀吉

蒲生氏郷
世世近江日野の城主。信長の死後秀吉に屬し、會津に封ぜらる。文祿四年二月歿す。(一二一一年—一二五五年)

太田道灌
名は持資。上杉定正の家宰たり。文明十八年七月定正に殺さる。(一四〇九年—一四六年)

菊池武時
勤王の士。肥後の人。薙髮して寂阿と稱す。元弘三年九州探題北條英時を攻めて戰死す。(一一九九三年)

ちはやぶる
うぢやまかぜに花のうづまくやどかな　蒲生氏郷

うぢやまに花をちるものをうらみてぞなきぬる風　太田道灌

ちはやぶる
あまつかぜ
くものかよひぢ
とじ
をとめの
すがたしばしとどめむ　菊池武時

源實朝
鎌倉第三代の將軍。頼朝の次子。承久元年正月鶴岡八幡社頭にて姪公曉に刺さる。(一八五二年—一八七九年)

那須のしの原
栃木縣那須郡。

梶原景時
景時の子。(一八二二年—一八六〇年)

平忠度
清盛の弟。薩摩守。壽永三年二月一の谷に死す。(一八〇四年—一八八四年)

もののふの
やそうぢがはの
あさぼらけ
しのの原
なみたちかぜ
なりにけり　源實朝

あきぎりに
まがきのもとの
ひとりぬれ
ぬれつゆをもとめて
みぐるしかりし
なりにけり　梶原景時

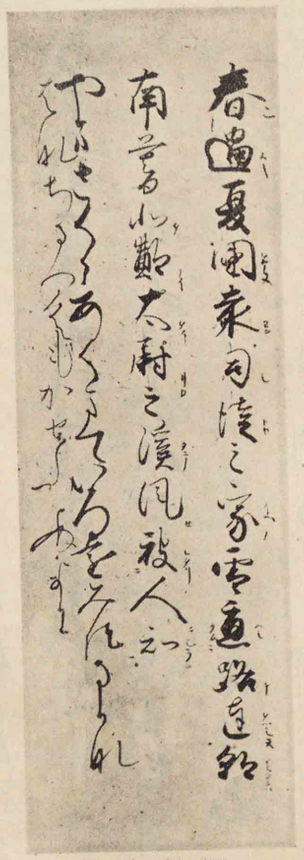
ゆきかへる
ちりのなごりを
をしむとて
花のあるじ
なりにけり　平忠度

源頼政

源頼政
仲政の子。治政四年以仁王を奉じて兵を擧げ、宇治の平等院に敗死す。（一一八四〇年）

春過夏闌袁司徒之家雪應路達ハ朝南暮北鄭太尉之渓風被ニ人知一。
やまさくらあくまでいろをみつるかなはなちるべくもかぜふかぬよに

源義家
頼義の子。八幡太郎と稱す。天仁元年卒す。（一七〇一年―一七六八年）
なこその關
茨城縣多賀郡にあり。



源頼政筆

源義家

厚い。（厚き）

九　野のにほひ

一、玉菜

玉菜は、そのむかし海岸植物として、潮の香の咽せるやうな斷崖に育ち、終日白馬のやうに躍り狂ふ海を眺めて暮らしてゐたことは、眞直に土におろした根の深さと、肉の厚い葉の强健さとでも知られることだ。あの大きな手のひらをいくつもいくつも重ね合はせて大事さうに胸に抱いた圓い球のなかには、一體何がしまはれてゐるのだらう。靜脈の痕がありありと讀まれるその手のひらを、一つ一つ丹念にめくつてゆくと、最後に小さな貝殻のやうな葉つばの外に

おつかぶせ（押しかぶせ）

は、何一つ殘されてゐないのに氣がつく悲しさ。上の葉は下の葉に無理强ひにおつかぶせようとし、下の葉はそれを跳ね返して明るい太陽の方へ手を伸ばさうとする希望は持ちながらも、或强い力に支配せられて、自分より下の葉には又同じやうにおつかぶせようとして居る。その重みと力とが互に咬み合ひ、互に抱き合つて、中に閉ぢ込められた葉は、永久に太陽を見ぬいらだたしさ。――私は玉菜を見る度に、いつもさうした胸苦しさを何よりも先に感じない譯にはゆかない。

二、里芋

里芋は著物を剝がれて、素つ裸のまま、臺所の片隅に顫へ

通つて（通りて）

てゐる時よりも、親芋と一緒に土から掘り出される折の方がずつとおどけてゐて、趣があるやうだ。親芋の大きな尻を取りまいて、多くの兄弟達がてんでに毛だらけなからだを摺り寄せてゐるのを見ると、小さな生物のやうな氣がして、尻尾の無いのが不思議な位である。

土だらけの里芋の皮を削り落さうとする時、どうかすると指先が痒くてたまらなくなるのは、玉葱や辣薤を手にする時に、眼のうちが急に痛くなるのと同じやうに、土から生まれたものの無言の皮肉である。

もう餘程以前の事だが、私は德富健次郎氏と連れ立つて、大阪道頓堀の戎橋の上を通つてゐた事があつた。大胯に二

三歩先を歩いてゐた徳富氏は、急に立ちどまつて背後をふり返つた。

「薄田さん、あなたお弟子をお持ちですか。

「弟子、――そんなものは持ちません。

その頃やつと二十五六だつた私に、弟子などあらう筈はなかつた。

「それで安心しました。どうかなるべく弟子なぞもたないやうにして下さい。子芋が出來ると、とかく親芋の味がまづくなるものですから。

徳富氏はかういつて、又すたすたと歩き出した。

私はその後、それと氣付かないで、ゑぐ芋を口に含んだ時には、すぐに徳富氏のこの言葉を思ひ出して、青道心の小坊主め、お前一人は親の味をよう盗まなかつたのか。氣の毒な奴だな」と、苦笑させられた事がよくある。

含んだ（含みたる）

三、白菜

籠に盛られた新鮮な白菜を見る時、私はまづ初冬の夜明の空氣の冷たさを感じ、葉つぱの縮緬皺にたまつた露のかなしい重みを感じ、また葉のおもてを滑る日光の猫の毛のやうな肌ざはりの柔かさを感じるが、その次の瞬間には、すぐこの野菜が鹽漬にせられた後の歯ざはりの快さを感じない譯にはゆかない。

ちやうど赤樂の茶盌を手にした茶人が、その釉藥の面白

しほづけ（鹽漬）

赤樂　赤色の樂燒。

みに火の力を感じると同時に、その厚ぼつたい口あたりに茶を啜る時の氣持よさを感じるのと同じやうなものだ。

四、栗

今日但馬にゐる人のところから、小包を送つて來た。手に取ると、包の尻が破れてゐて、焦茶色の大粒の栗の實が、四つ五つころころと轉がり出した。

「いよう、栗だな。丹波栗だ……。

私は思はず叫んだ。そしてその瞬間、子供のやうに胸のときめきを覺えた。どれもこれも小鳥のやうに生意氣に嘴を尖らし、どれもこれも小肥りに肥つて、はち切れるやうに背を圓くしてゐる。焦茶色の肌は太陽の熱を貪るやうに吸つ

て、こんがり燒け上つた氣味だ。

唐木机の脚、かぶと蟲の兜、蟋蟀の太腿――強健なものは、多くの場合に焦茶色にくすぼつてゐる。

夏の末に雜木林を通ると、頭の上に大きな栗の毬がぶら下つてゐるのを見かけることがよくある。はぜ割れた毬の中から、小さな栗の實が頭を出してきよろきよろしてゐるのは、巣立ち前の燕の子が、泥の家から空を窺つてゐるやうなもので、その眼はものの好きと冒險とに光つてゐるが、燕の母親がその雛つ子達を容易には巣の外へ飛び出させないやうに、胸に抱へた子供達の向見ずな慾望を知つてゐる栗の毬は、めつたに自分のふところを緩めようとはしない。

籠つて（籠りて）

殼のなかに閉ぢ籠つて、太陽を飽食してゐる栗の實は、日に日に肉づいて往つて、我とわが生命の充實し内壓する重みに、持ちこたへられなくなつて來る。

實が殼から離れゆく秋が來たのだ。内部の強い動きから、毬はおのづと大きくはぜ割れる。向見ずの栗の實は「まだ見ぬ國」にあくがれて、われがちに殼から外へ飛び出して來る。焦茶色の頭巾をかぶつた燕の子の巣立である。

或ものは靜かに枯葉の上に落ち、或ものは石にぶつつかり、かちんと音を立てて、跳ね返りざま、どこかに姿を隱してしまふ。――どちらにしても、親木の立つてゐる場所から八尺とは離れてゐない。彼等はそれを少しも悔まない。彼等に

とつてともかくもそこは「まだ見ぬ國」なのである。焦茶色の外皮の堅さは、こんな場合にもかすり傷一つ負はせない。

私はこんな事を思ひながら、栗の實の二つ三つを嚙んで、それを火鉢の灰に埋めた。灰の中からぷすぷす煙がいぶり出して來た。（薄田泣菫――艸木蟲魚）

折ふし友の訪ひ來るあれども、大森の僑居、地僻にしてこれに饗すべきものなし。乃ち、時に滿庭の落葉を集めて藷を燒く。白煙黑煙高く渦まき上り、猛火風に煽られて颼颼の聲を發するところ、枯枝を取つて熱灰を探れば、累累として藷既に柔かなり。未だ味はざるに、これを圍むもの皆破顏一笑す。

落葉かいて君と小藷を燒かんかな。（杉村楚人冠）

蔽うて（蔽ひて）

一〇 犍陀多

或日の事でございます。お釋迦樣は、極樂の蓮池の縁を一人でぶらぶらお歩きになつていらつしやいました。

池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞白で、その眞中にある金色の蕊から、何ともいへない好い匂が絶間なくあたりへ溢れて居りました。極樂は丁度朝でございましたやがてお釋迦樣はその池の縁にお佇みになつて、水の面を蔽うてゐる蓮の葉の間から、ふと下の樣子を御覽になりました。

この極樂の蓮池の下は、ちやうど地獄に當つてをりますから、水晶のやうな水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、まるで覗眼鏡を見るやうに、はつきりと見えるのでございます。

まをし（申）（まうし）

芥川龍之介

すると、その地獄の底に犍陀多といふ男が一人、外の罪人と一緒に蠢いてゐる姿がお眼に止まりました。

この犍陀多といふ男は、人を殺したり、家に火を附けたり、いろいろ惡事を働いた大泥坊でございますが、それでも、たつた一つ善い行をした事がございます。と申しますのは、ある時、この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路端を這つて行

くのが見えました。犍陀多は、早速足を擧げて踏み殺さうと致しましたが、「いやいや、これも小さいながら命のあるものに違ない。その命を無闇に取るといふことは、いくらなんでも可哀さうだ」と、かう急に思ひ返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやりました。

お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひ出しになりました。さうしてそれだけの善い事をした報には、出來るならこの男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ側を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹美しい銀色の絲を懸けてをりました。お釋迦様はその絲をそつとお手にお取りになりました。さうしてそれを玉のやうな白蓮の間から、はるか下にある地獄の底へ眞直にお下しなさいました。

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に浮いたり沈んだりしてゐた犍陀多でございます。

何しろ、どちらを見ても眞暗で、たまにその暗闇からぼんやり浮き上つてゐる物があると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといつたらございません。その上、あたりは墓の中のやうにしんと靜まり返つてゐて、たまに聞えるものといつては、ただ罪人が吐く微かな溜息ばかりでございます。これは、ここへ墮ち

むくい。（報）

まつくら
まくら
（眞暗）

て來るほどの人間は、もう樣樣な地獄の責苦に疲れはてて、泣聲を出す力さへもなくなつてゐるのでございました。さすが大泥坊の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかかつた蛙のやうに、只もがいてばかりをりました。

ところが、或時の事でございます。何氣なく犍陀多が頭を擧げて血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした闇の中を、遠い遠い天の上から銀色の蜘蛛の絲が、まるで人目にかかるのを恐れるやうに、一筋細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて參るではございませんか。

犍陀多はこれを見ると、思はず手を打つて喜びました。こ

打つて（打ちて）

の絲に縋り付いて、どこまでも登つて行けば、きつと地獄から脫け出せるに相違ない。いやこいつは旨く行くと極樂へはひる事さへ出來るかも知れないぞ。さうすれば、針の山へ追ひ上げられることもなくなるし、血の池に沈められることもある筈はない。

かう思ひましたから、犍陀多は早速その蜘蛛の絲を兩手でしつかりと摑みながら、一所懸命に上へ上へと手繰りのぼり始めました。元より大泥坊のことでございますから、かういふ事には昔から慣れ切つてゐるのでございます。

然し、地獄と極樂との間は、何萬里となく隔つてゐるものですから、いくら焦つて見たところで、容易に上へは出られ

焦つて（焦りて）

ません。稍暫く登る中に、とうとう犍陀多も草臥れて、もう一手繰も上の方へは登れなくなつてしまひました。

そこで仕方がございませんから、まづ一息休むつもりで、絲の中途にぶら下りながら、遙に目の下を見下しました。すると、一所懸命に登つたかひがあつて、さつきまで自分がゐた血の池は、今ではもういつの間にか闇の底に隱れてをりました。それから、あのぼんやり光つてゐた恐しい針の山も、足の下になつてしまひました。この分で登つてゆけば、地獄から脫け出すのも存外譯がないかも知れません。

犍陀多は兩手を蜘蛛の絲に絡みながら、ここへ來てから何年にも出したことのない聲で、「しめた、しめた」といつて笑

ひました。

ところが、ふと氣が附きますと、犍陀多の絲の下の方には、數限もない罪人たちが、自分の登つた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ上へと一心に攀ぢ登つて來るではございませんか。

犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、暫くはただ馬鹿のやうに大きな口を開いたまま、眼ばかり動かしてをりました。自分一人でさへ切れさうなこの細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へることが出來ませう。若し萬一途中で切れたと致しましたら、折角ここまで登つて來たこの肝腎な自分までも、もとの地獄へ逆落し

まんなか
まなか
（眞中）

に落ちてしまはなければなりません。そんな事があつたら大變でございます。

が、さういふ中にも、罪人たちは、何百となく、何千となく、眞暗な血の池の底から、うようよと這ひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を、一列になりながら、せつせと登つて參ります。今の中にどうかしなければ、絲は眞中から二つに切れて落ちてしまふに違ありません。

そこで、犍陀多は大きな聲を出して、「こら、罪人ども、この蜘蛛の絲はおれの物だぞ。お前たちは一體誰の許しを受けて登つて來た。下りろ、下りろ」と喚きました。

その途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲

が、急に犍陀多のぶら下つてゐる處から、ぷつりと音を立てて切れました。あつといふ間もなく、風を切つて獨樂のやうにくるくる廻りながら、犍陀多は見る見る中に闇の底へ眞逆樣に落ちてしまひました。

後にはただ極樂の蜘蛛の絲がきらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れてゐるばかりでございます。

お釋迦樣は極樂の蓮池の縁に立つて、この一部始終をぢつと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顔をなさりながら、又ぶらぶらお歩きになりました。

自分ばかり地獄から脱け出さうとする犍陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當の罰を受けて、もとの地獄へ墮ちてしまつたのが、お釋迦樣のお目から見ると、あさましく思し召されたのでございます。

然し、極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には貪著致しません。その玉のやうな白い花は、お釋迦樣のお足のまはりにゆらゆらと蕚を動かしてをります。そのたんびに、眞中にある金色の蕋からは、何ともいへない好い匂が、絶間なくあたりに溢れ出ます。

極樂も、もう正午に近くなりました。（芥川龍之介――傀儡師）

芥川龍之介　小説家。東京の人。昭和二年七月歿す。（二五五―二五八七）

一一　推理の誤謬

博物學を修める間には、おのづから歸納的推理の力が發達する。歸納的推理の力が發達すれば、自然に何をする時にも、この論法に從つて考へる習慣が出來て來る。これが又非常に大切なことであると思ふ。何故といふに、歸納的推理法では、現在の事實を集め、それより全體に通ずる理を考へ、結果から原因を探る方法を取るゆゑ、その結論には誤が極めて少い。嚴重にこの論法を用ゐると、その結論は箇箇の事實に通じた或廣い事實をいひ現はすに過ぎないから、理論と實際とが全く一致する。

世の中には、理論と實際とはまるで別物であるやうに考へてゐる人が多いやうであるが、これは全く空理空論が世の中に流行するからである。事實を正しく觀察調査し、これを集めて材料として歸納的に論じて行けば、その結論は卽ち事實であるから、實際と相違する譯はない。常識又は普通識といふのは、卽ち現在の事實を材料とし、歸納的に論じた結果である。この常識といふものは、一箇人の生活にも社會の發達にも極めて必要なものであるが、博物學で歸納的推理の習慣を作ることに依つて、大いにこれを進めることが出來る。

わが國では空理空論がなかなか盛である。その例を擧げ

東海道中膝栗毛　十返舍一九作の滑稽小說。

六部

始めたら限が無からうが、その原因は基礎となるべき事實を十分に觀察しない故か、又は論法が逆であつたり、粗漏であつたりする故である。素より何事にも歸納的論法ばかりで間に合ふものではない。現在ある事實の原因を探るには歸納法が主であるが、新に何物かを工夫し創造するには、必ず歸納法で得た結論を、箇箇の場合へ演繹的に論じ及ぼさなければならない。然し原因より結果を推し、一の原理より箇箇の場合へ考へる論法は、餘程鄭重に考へぬと、とんでもない結果に達する虞がある。東海道中膝栗毛といふ小說の中に、六部の懺悔話があるが、あれがこの種の論法の誤り易いことを明かに示して居る。

吹いて（吹きて）

その六部はかう考へた。まづ江戸へ來て見た所が、毎日非常に風が吹いて、往來が砂だらけである。かう砂が舞へば必ず人人の眼に砂がはひつて、盲目になる人が大勢出來るであらう。盲目になれば鳴物で生活するから、必ず三味線をひくに違ない。さうすれば三味線が澤山いるから、猫が皆殺されるにきまつて居る。猫が皆殺されれば、鼠が暴れ出して箱を殘らず嚙み破るに相違ないから、箱商賣を始めたら必ず非常に大繁昌するであらうと考へて、箱を澤山に仕入れて店を出したが、一向賣れなかつた故、つくづく浮世が厭になつて六部になつた」とのことである。

これは素より一つの笑話に過ぎないが、宗教や哲學や教育

學の如き無形の事柄を論ずる場合には、隨分右の話に負けないやうな論法も少く無いやうに見える。殊に青年時代には、自分の考へた空理空論を實行しようと思ふ傾があるが、常に事實を集め、これより歸納的に論じて行く習慣をつけて置けば、たとひ一方で空理空論を考へても、自分で自分の空理空論の間違つて居ることに氣が付いて、それをそのまま實行するやうな過を避けることが出來る。この事は現今の社會に最も必要であると思ふ。（丘淺次郎）

丘淺次郎　動物學者。明治元年十一月生まる。靜岡縣の人。理學博士。東京高等師範學校名譽教授。

あわて者、ある古道具屋の店先に忌部燒の古い壺が伏せてあるのを見て、「ああ見事な壺だが、惜しいことに口が無い」といひさま、一寸引つ繰りかへして見て、「なんだ、底も拔けてゐる。」（諺言）

大久保　東京市牛込區に鄰接せる町。豐多摩郡に屬す。
築地　東京市京橋區にあり。
拂つて（拂ひて）

一二　落葉

四年前大久保の家を賣り拂つて、築地の露地に引き移らうとしたのは、ちやうど落葉の最も多い十二月であつた。山の手の古庭はいふまでもなく、落葉は庇の上にも緣の下にも一面に散りつもつてゐた。わたしは病後の餘生を送るに必要な調度と藏書の一部とのみを殘して、その他の物は悉く賣り拂つて身輕になりたいと思つた。病餘孤獨の身は家を治むる力もなく、藏書は唯蟲の喰ふに任せるより外はなかつたからである。多年出入の本屋の主人が、毎日大久保の庭の上に家財道具を運び出して、賣る物と殘す物とを選り

きず（瑕）

分けてくれた。

庭一面の落葉は、道具の調や荷造をするには、蓆や薄べりを敷くよりも遙に誂向なものであつた。誤つて花瓶や蓋を地に落した時も、散り敷く落葉は蒲團のやうに軟かな爲に、瑕一つ附きもしなかつた。終日樹の下に畫幅や古書を投げ棄てて置いても、乾いた枯葉のために少しも濕める虞がなかつた。

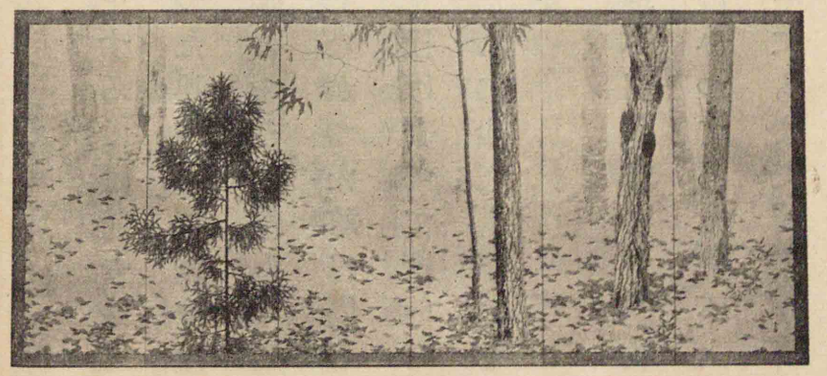
永井荷風

十二月もいつか冬至といふ日、築地へ引き移つて荷物を解くと、衣類や蒲團の間にも落葉がはひつてゐた。鼠不入の中にも落葉がはひつてゐた。本箱の中にもまた落葉が舞ひ

込んでゐた。一枚一枚皆見覺えた樹木の葉である。同じ楓の葉にしても、わたしはその色とその形とによつて、直樣これは舊宅の庭の、どの邊に立つてゐる樹の葉であるかを辨別し、續いて雨を聽き月を賞した折の情と景とを回想した。

築地に在ること一年半ばかり、更に今住む麻布の家に移つてからも、曝書の折折、わたしは日頃繙くことを忘れてゐた書册の間から、舊廬の

麻布　東京市麻布區。



落　葉（菱田春草筆）

落葉を發見して、覺えず愁然とする事がある。わたしが常に大久保の舊廬を思うて止まない所以は、わが青春のあらゆる記憶のここに宿るが爲である。父母の恩を思ふにつけて、わが不孝の罪を悔ゆるが爲である。樣樣の歡樂に飽き、藝術のまどはしから覺めた中年の感慨ほど苦しいものはない。藏書の間に紛れ込んだ舊廬の落葉は、今のわが身には、むしろ古書よりも懷しい物となつた。

苦しい。（苦しき）

わたしが落葉に對して、初めてただならぬ感激を催したのは、二十四の時亞米利加へ行つた時である。初めてヴェルレエヌの詩を讀んだのもこの時分であつた。渡航の以前にあつては、落葉に對する感興の記憶は一つもない。いはゆる

ヴェルレエヌ　佛國の詩人。（西暦一八四四年―一八九六年）Verlaine

世紀末の憂悶に觸るべき年齢に達してゐなかつた爲であらう。

落葉は隱棲閑居の生涯の友である。時雨の降る夕べ、落葉の道を過ぎてひとり家に歸り、戸口に立つてつぼむる雨傘の上に、落葉の二三片とまつたのを見る時の心は、清寂の限である。寒月照り渡る庭に立ち出でて、喬木の頂から落葉の紛紛として月光の中に閃き飛ぶさまを看るは、悲壯の限である。若しそれ風絶えて空曇つた寒い日の暮近く、鶺の餌をあさりながら、空庭に散り積つた落葉をがさりがさりと踏み歩む音の寂しさに至つては、恐らくは古池の水に蛙の飛び入る響にも劣るまい。（永井荷風――麻布雜記）

鶺

永井荷風　文學者。名は壯吉。明治十二年十二月生まる。東京の人。

尾崎喜八　詩人。東京の人。明治二十五年生まる。

神田　東京市神田區。
新宿　同四谷區。

一三　甲州街道の牛に

（尾崎喜八）

からころ、からころ、田舍の奥から
眞夜中の幾里の夢路を縫ふやうに、
なつかしい車の音を響かせながら
神田、新宿の市場へ出ていつたお前達が、
行列で歸つて來る朝の街道はお祭だ。
空は高いし、お天道さまは麗かだし、
踏みごたへのある路はひろびろ伸びて、
けものの耳を吹くのは爽かな秋風。
そのなかを涎を流し、遠い眼をし、

もず（百舌鳥）
百舌鳥

すばらしい肩と腰とで急がずゆつくり、
町通りから杉並木へ、
立場から石橋へ、
どこからともなくきらびやかな本犀の香の漂ひ、
生垣や腰高障子の光る甲州街道の眞中を、
頭をうごかし、尾を振り振り、
後から後から凱旋して來るお前達は、
百舌鳥の鳴きしきり、取入物の金に輝く、
武藏野の秋の田舍の王樣だ。

（詩讀本）

大宮表　京都市上京區。
信頼　藤原氏。權中納言、檢非違使別當。平治の亂の首魁。亂後六條磧に斬らる。（一七九三年―一八一九年）
桓武天皇の後裔　桓武天皇―葛原親王―高見王―高望―國香―貞盛―維衡―正度―正衡―忠盛―清盛―重盛
待賢門　大内裏の東面の中央にあり。
鎌田兵衛　名は政家。

一四　待賢門の戰

左衛門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に殘しおき、五百餘騎にて押し寄せて、「この門の大將軍を信頼卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の後裔、太宰大貳清盛が嫡子、左衛門佐重盛生年二十三」と名のりかくるに、信頼返事にも及ばず、「それ防げ侍共」とて引き退く。重盛これに勢を得、いよいよ勇みて、大庭の椋の木の下まで攻めつけたり。

義朝これを見て、「惡源太はなきか。信頼といふ大臆病人が待賢門をばはや破られつるぞや。かの敵追ひ出だせ」と宣へば「承ばり候ふ」とて驅け出でらる。續く兵には鎌田兵衛、後藤

清和天皇九代の後胤　清和天皇―貞純親王―經基―滿仲―頼信―頼義―義家―爲義―義朝―義平

大庭　紫宸殿前の庭。

兵衞、佐佐木源三、三浦荒次郎等十七騎、轡をならべて馳せ向ふ。大音聲を揚げて、「この手の大將は誰人ぞ。名のれ、聞かん。かく申すは清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が嫡子、鎌倉惡源太義平と申すものなり。生年十九歳。見參せん」とて五百騎の眞中へ割つて入り、縱横十文字に敵をさつと蹴散らして、「葉武者共には目を懸くな、大將軍と押し竝べて組んで落ち、手捕にせよ」と、惡源太をはじめ十七騎の兵共、大將軍に目をかけて大庭の椋の木を中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追ひ廻して、組まんと組まんと揉み合ひたり。十七騎に驅け立てられて、五百餘騎大宮表へさつと引く。

「大將重盛は弓杖ついて馬の息をつがせ給ふ所に、筑後守

平將軍　平貞盛をいふ。

組んで（組みて）

ふんばり（ふみはり）（踏み張り）

家貞つと參つて、「先祖平將軍の二度生まれかはり給へる君かな」と譽め奉れば、今一度驅けて家貞に見せんと思はれてか、前の五百餘騎をば留めおき、荒手五百餘騎を從へて、又大庭の椋の木まで攻め寄せたり。惡源太驅け向ひ見まはしていひけるは、「唯今向ひたるは皆荒手のつはものなり。但、大將は元の大將重盛ぞ。今度こそ餘すまじ。押し竝べて組んで捕れ、つはもの共」と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、われ先にと進む。難波次郎、同じき三郎、瀨尾太郎を始として百餘騎が中に隔てたるに事ともせず、惡源太鐙ふん張り立ちあがり、左右の手を擧げ、「幸に義平源氏の嫡嫡なり、御邊も平家の嫡嫡なり。敵として不足なし。寄れや組まん」といふままに、五

六度まで揉み合ひたり。重盛組んではかなはじと、又大宮表へ引いて出づ。

惡源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖ついて馬に息をつがせゐたるに、義朝これを見て、「汝が不覺に防げばこそ敵度度驅け入るらめ。あれ速かに追ひ出だせ」といひ遣はす。惡源太、「承はり候ふ。進めや者共」とてあひもかはらぬ十七騎、大宮表に驅け出でて、敵五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引き足立つたる平家勢、馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を東へ引き退く。義朝は「わが子ながらも義平は、よく驅けたるかな。あ驅けたり」とぞ譽められける。

大將重盛は與三左衞門景安、新藤左衞門家泰と主從三騎

割つて（割りて）

二條　京都市上京區。

かけ離れ、二條を東へと引き退く惡源太、鎌田にきつと目くはせして、「そこに落ちゆくは大將なるべし。引き返せや」とて追ひかく。既に堀川にて追ひ詰めたるが、左手の方に材木多く積み重ねたるに驚きてか、惡源太が馬右手の方へ蹶飛んで、膝をば折つてどうと伏す。鎌田は敵を遁がさじと、十三束の矢取つて交へ、ふつと射たるが、重盛の鎧の袖にあたりながら跳ね返る。すぐに二の矢を射たるも、また跳ね返つて矢がらは碎けて落ち散つたり。惡源太「これは聞ゆる唐皮といふ鎧ならん。まづ馬を射て、落ちんところを擊て」と呼ばはれば、鎌田また追ひ懸けながら、筈の隱るる程に射込む。馬は屏風返しに倒るるに重盛は材木の上に跳ね落され、冑もおち

堀川　京都市上京區。

唐皮　平家重代の名器。

て亂髪となる。鎌田は組まんと飛びかかる。重盛近づけては
と、弓の弭にて鎌田が冑の鉢をちようと突く。突かれてゆら
めく間に、冑を取つて著、忍の緒をぐつと締む。景安驅け寄つ
て中を隔てて、『主辱しめらるる時は臣死す。』景安ここに在り。
寄れや組まん」といふままに、鎌田と組んで取つて押さふ。惡
源太は馬引き起し、續いて重盛に組まんと驅け寄りたるが、
この體を見て、大將には又も出會ふ折あるべし、鎌田を討た
せてはかなはじと咄嗟の間に思案を定め、景安を捉へて三
刀刺して首を取る。重盛は憑み切つたる景安討たせて何か
生き長らへんとて、既に惡源太に組まんとするを、家泰馳せ
來たつてわが馬を間に引き向け、惡源太にむずと組みつく。

主辱しめらるる時は云云
國語の越語に「君辱臣死」。

六波羅
京都市下京區。清盛の本邸。

十二月二十七日
平治元年。

巳の刻
今の午前十時。

乘つたり
（乘りたり）

鎌田は重盛に組まんとしたるが、主を討たれてはと家泰に
折り重なつて首を搔く。この間に重盛は虎口を遁れて六波
羅まで落ちられたり。二人の侍なからんには、助かりがたき
命なり。

時はこれ十二月二十七日の巳の刻なり。一時雨さつと降
りかかつて、風烈しく吹き立つ。鎌田は鞍の前輪につらゐ
て乘りかねたり。惡源太これを見て「手形をつけて乘れや」と
宣ふ。鎌田すなはち打物拔いてつぶつぶと手形を切つて、そ
れをたよりに乘つたりけり。鞍に手形をつくることこの時
より始まるとぞ。（平治物語による）

一五　國史に返れ

「國史に返れ」。日本國の歴史は大和民族の系圖である、吾人が祖先の功科表である、日本帝國の寶庫である、日本國民の經典である。日本國を知るには、歴史を透して知るより他に方便がない。國史は實に忠實なる案内者である、信頼すべき指導者である。吾人は歴史的に考慮せねばならぬ。すべての人類は平等觀よりすれば皆同胞である。されど歴史觀よりすれば、すべての國は皆特殊の性格を具へてゐる。甲國と乙國とは同じでなく、乙國と丙國とは違ひ、而して丙國と甲國とも亦同じでない。十箇國あれば十箇國の相違があり、百國あれば百國の差異がある。この特殊の國性を維持する上に於いて、始めて獨立國の意義が完くされる。獨立國の本義は形式的に他の干渉を絶ち、我が自主の體面を保つのみではない。精神的に自主であらねばならぬ。詳にいへば精神的に自國の國性を把持し、保存し、開展し、發達させねばならぬ。

徳富蘇峯

我が大和民族の誇は、日本の歴史である。この歴史の中には、必しも悉く皆正しい事善い事のみが滿ちてはゐない。必しも悉く敬ふべく仰ぐべき事のみが溢れてはゐない。人間は決して神様ではない。人間の所作には樣樣の過失もあれば罪惡もある。さ

語つて（語りて）

れど總括していへば、日本の歴史は大和民族の恥辱史ではなく、光榮史である。

如何に日本の皇室が、世界に比類なきあり難い皇室であるかは、國史が最も雄辯にこれを語つてゐる。如何に日本の國民が、その一旦緩急の際に處して、護國の精神の猛烈に且勇敢であつたかは、國史がその證人である。如何に大和民族の中に世界的偉人と比較して一歩も劣らぬ者、卽ち彼自身また世界的偉人と稱するに足る者を生じたかは、長き年代の中に屢接觸する所である。卽ち我が明治天皇の盛德大業も、國史の背景によりて始めて明白に、精詳に、剴切にこれを會得することが出來る。卽ち五箇條の御誓文の如きも、國史

株守

韓非子に、「宋人有ニ耕レ田者一、田中有レ株、兎走觸ニリテ株一、折レ頸而死、因釋ニ其耒一而守ラフタンコトヲ株、冀ニ復得ント兎一。兎不レ可レ得、而身爲ニ宋國ノ笑ヒ一。」

の背景なきに於いては、只一種の雄快なる文書たるにとどまる。帝國憲法の如きも、國史の背景なきに於いては、單に乾燥無味なる一部の法文にとどまる。

凡そ固陋頑冥の戀舊思想や、保守退嬰の島國根性や、若しくは詭激狂妄の赤化主義や、架空浮誇の摸倣精神や、何れも我が國史を閑却した爲といふを適當とする。現狀を株守するも國史を知らぬが爲、現狀に不安なるも國史を知らぬが爲、國民的自信力を失墜するも國史を知らぬが爲、自惚根性にて醉生夢死するも國史を知らぬが爲ではないか。

「國史に返れ」とは、すべての國民が歴史家となれといふのではない。それには專門の學者がある。只日本國民として日

本の歴史のその大いなる筋道を諒解せよといふのである。この歴史は精神的に於ける日本の潛在せる寶藏である。苟も國民的に生活し、且活動せんとせば、まづこの寶藏に向つてすべての物を求めるがよい。（德富蘇峯――國民小訓）

德富蘇峯　名は猪一郎。熊本縣の人。文久三年正月生まる。國民新聞を創刊して永く社長たりしが、今大阪毎日新聞東京日日新聞の社賓たり。貴族院議員。論說、史傳等多數の著述あり。

幕府の末に、某といふ顯官の歐洲に使することありしに、さる友より祖道の贈物として、歴朝の御諡號年號などを手づから抄記せる一小冊子を受けたり。歸朝の日その友への挨拶に、「西洋人の屢本邦の事を問ひけるに、若し君の賜なくば、我殆ど危く到る處に身と國との恥辱を遺ししならむ。小冊子の賜は實に千金の贐にも勝れるを覺えぬ」といへりとぞ。その國に生まれてその國の事を知らずとありては、紳士淑女としての素養を缺けるのみならず、やがて報本反始の情に薄く、忠君愛國の操に乏しきを表はすものなれば、かの顯官の挨拶は衷心より出でたる喜の詞なりしなるべし。（三上參次）

ひろなりの皇子　九十八代後龜山天皇。（一二〇四三年―一二〇五二年）

菜摘河　奈良縣吉野郡。

實爲中將　藤原氏。實村の子。

一六　祈りなほし

ひろなりの皇子、いまだ幼うおはしましける時に、若き殿上人數多伴はせ給ひて、菜摘河の川淀の邊にて、鷹つかはせて御覽ありけるに、傍にいと大きなる岩のえもいはず面白きに、松の生ひ出でたるありけり。皇子御覽じて、「この岩を、歸りなむ時皇居のお庭にもてまゐれ。上に奉らむ」と實爲中將に宣ひければ、幼き御心を推し量りて、御ことうけし給ふ。

後龜山天皇御筆

侍從源忠行。

鳥など數多とりて歸らせ給へる時に、侍從に、「岩を忘れたり」と宣ひければ、「民部大輔が力も強く侍れば、御後よりもて參り候ふなり」と啓して、さて皇居に還り入らせ給ふ。

御鷹の鳥など奉らせ給ひて、實爲中將に、「ありつる岩を」と召させ給ふに、「侍從こそ仰言を承はりつれ」と啓し給へば、侍從を召して、「いかに」と尋ねさせ給ふ。「民部大輔の、御後よりもて來むといひ侍るを、民部を召させ給ひなむ」と啓す。中將ありつる事を奏し給ひければ、上にもをかしがらせ給ひて、「誠に面白からむ。岩こそ見まくほしけれ。民部の力強ければ必ずもて來なむ」と宣ふ。

中將立ちかへり給ひて、民部大輔に、「かかる事なむある。いかがせむ」と宣へば、「すべき事こそあれ」とて、御庭にありける小さき岩に、松の枝を取り附けて、中將といと重げに持ちて宮の御前にすゑ奉れば、「これはいと小さくこそあれ。それにはあらじ」とむつがらせ給ひければ、民部大輔の、「さればこそ。その岩を持ちて上の山を通り候ひしに、左右、山のさし出でて、道のいと狹き處にてかなひ難く、いかにせむとただよひ侍りしに、向の方より山伏の來たりけるが、『岩にせかれて通られぬなり。除け給へ』とののしりけるほどに、『我もせむ方なさにかくて侍り』とわぶれば、さらばすべき事こそあれとて、數珠をおし揉み、何やらむ呟きて祈るに隨ひて、この岩小さくなりければやすやすと通りて侍りしほどに、山伏も行き

過ぎしを、呼び返して、『もとの如く祈りなほしてよ』といひければ、『又ゆく先に細き道のあらむに、いかがし給はむ』といひしほどに、げにもと思ひ侍りて、そのままもて參りぬ」といひ給へば、上より始めありつる人人をかしがらせ給ふに、宮の御氣色もよくならせ給ひて、「げにさもあらむ。その山伏を召し返せかし」と宣ふに、「はや遙に行き過ぎて、いづこへ行きけむも知られず」と啓し給へば、「本意なき事にこそあれ。とどめて民部大輔が大きなるそら言を、小さきやうに祈らせむものを」と笑はせ給ふにこそ、御行末頼もしく、いとせめて覺えたりしか。（吉野拾遺）

お年寄　町年寄。名主を管す。
町役　町役人の略。名主、五人組等をいふ。
わるうは（わるくは）

一七　南京の壺

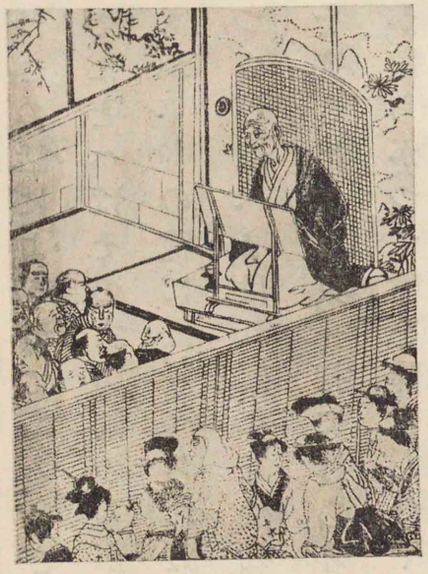
さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、町役、家持の人人、一同に座に著きますると、さまざまの馳走がある。時にかの年寄は、酒と聞いては笹の露にも醉ふほどの下戸ぢや。座中を廻る盃の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なりとも御取り下されい」と、南京の古染附の壺に大輪の金米糖を入れて、年寄の前へ持つてくる。座中も、「これはよいお心づき、ひらにお菓子を召しあがれい」と勸むるに、年寄もわるうはなし、「しからば頂戴

を致しませう」と壺を引きあげ、手首を突つこみしなに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手をさし入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて拔けませぬ。どうぞして拔けるかと、色色にこじ廻して見ても、引つぱつて見ても拔けず、まごまごして居らるると、側から見つけて、「どうなされましたぞ」。「いや、手が少し詰りまして思ふやうに拔けませぬ」と眞顏になつていはるる。「それは氣の毒。私が壺を持つて居りませう。無理無體に手をお引きなされ」と、一人が向へまはつて壺をつかまへ、あとへ引くと、年寄は手を前へ引く。互にえいやと引き合ふ有樣、景清と美保の谷が鍛曳をするやうなと、座中が一同にどつと笑へど、年寄はなかなか笑はず、泣顏になつ

引つぱつて（引きはりて）

景清と美保の谷
惡七兵衞景清。美保の谷十郎。

て、「どうも痛んで拔けませぬ」といふ。さあ、これから大騷になり、「醫者どのを呼んで來い。骨接ではゆくまいか」と、酒宴の興も醒め果てました。時に五人組が一人進み出で、「いづれもお騷ぎなさるな。われら承はつたことがある。『昔、司馬溫公といふ人、幼いとき大勢の小兒と共に、大いなる壺のほとりに遊びましたが、一人の小兒誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃げ歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、側なる手ごろの石を取つて、かの



心學講話

司馬溫公
名は光。字は君實、溫公は諡。宋の名相。（西暦一〇一九年―一〇八六年）

壺へ投げ附けましたれば、壺は割れて、はまつた小兒は不思議に命を助かりました』と或人の話ぢや。今お年寄の御難澁はこの話によう似てある。いざや、われらが司馬溫公となつて、たとへばその古染附の壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ」と、しかつべらしく煙管をひつさげ、向へまはれば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突き出すと、只一打に打ち碎いた。何がさて、座中は金米糖が散らかつて雪を降らしたやうになると、「やれ、お年寄お助かりなされたか」とその手を見れば、拔けぬこそ道理なれ、金米糖を一杯攫んでゐられたと申すことぢや。なんと可笑しい話ではござりませぬか。攫んだ物を放しさへすれば自由

よう。（よく）
ひつさげ（ひきさげ）
攫んだ（攫みたる）

自在に手は拔けたものを、一度攫んだら首がちぎれても放すまいと、片意地な生まれつき、それで自由自在の大安樂が出來ぬのぢや。かく申せば錢金の事のやうなれど、攫むものはこれぱかりではない。器量のよいを攫み、賢いを攫み、貧惜を攫み、家柄を攫み、身代のよいを攫んで、放すまいとかつぎ歩くによつて、教を聞くこともならず、樂をすることもならず、愼も出來ず、せん方なさに癪氣抑へたり、顏しかめたり、酒飲んで紛らしたり、さりとては氣の毒なものでござります。壺割つてしまうてからは、何いうても詮ないことぢや。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。

それでもわが本心は明かな、明德は曇つてはない、洗濯す

割つてしまうて（割りてしまひて）
いうても（いひても）

はやう。（はやく）

るには及ばぬと思ふ人があるものぢや。これを喩へて申しまするに、私のやうな盲が一人旅をして、心やすい旅籠屋にとまり、「あすの朝は七つ立をさして下され」と賴む。亭主も心得、朝早う立たせまする時、盲は旅の支度をととのへ、杖を持つて出ようとすると、亭主がいふには、「まだ夜深いに提灯をお持ちなされ。お貸し申しませう」。「何をいはしやるやら、盲が提灯を持つて何にするものぢ」。「いえいえ、お前には入りますまいけれど、暗がりをとぼとぼ御出でなさるると、往來の人が行き當りまする。それで提灯をお持ちなされと申すことぢや」。「なる程さうぢや。私は行き當らねども、えて目明がつき當る。さやうならお貸し下されい」と提灯をさげて道五六町

とうに。（疾くに）

失うて。（失ひて）

出ましたところが、向から來る人が盲にはたと行き當りました。そこで大きに腹を立てて、「おれに突き當るやつは盲か」。向の人も疳癪に障り、「おれは盲ではない。さういふおのれがどう盲ぢや」。「いやいや、おれは盲ぢやけれども、人には突き當らぬ。おのれが盲に極まつた」。向の人も愈腹立て、「おれを盲といふ證據は、何ぞ覺があつていふのか」。「おお、覺がある。おのれを盲といふ證據は、この持つてゐる提灯がおのれが目にはかからぬぢやないか」と、ずつとさし出す提灯の火は、宿屋の門口でとうに消えてしまうてある。なんと氣の毒な盲ではござりませぬか。火もともさぬ眞暗な提灯をさげて、これでも明かなと思うてゐるのは、本心見失うて、身勝手な心を本

心ぢや本心ぢやと思ひ、洗濯せうとも慎まうとも思はぬ人によう似たものでございます。どうぞお互に、火は消えてはゐないかと、日日に吟味が致したいものでございます。

（柴田鳩翁――鳩翁道話）

人の目は百里の遠きを見れども、その背を見ず。明鏡と雖もその裏を照らさず。離婁の明目なるも、その睫を見ることなし。ここを以て人知ありと雖も、わが身の過は知り難し。故に君子の學は專らわが身を省み、人の諫を聽き用ゐ、過を知りて改むるを旨とす。「子路は我が過を人の告ぐるを喜べり。故に百世の師なり」と程子もいへり。人を知ることは誠に難しといへど、わが身の惡しきを知るは又人を知るよりも更に難し。ここを以て我が過を告ぐる人あらば誠に喜ぶべし。人わづかなる財を贈り、或は酒肴をおくるも、受くる人これを喜ぶ。況や、いひ難き諫をいひ、自ら知り難き過を聞くをや。わが身に於いてかかる大いなる益なし。（貝原益軒）

洗濯せう。（洗濯せん）

柴田鳩翁　心學者。京都の人、字は陽方、通稱謙藏。中年明を失ひ、諸國を遊歴して心學講話をなす。民衆を教化する所頗る多し。天保十年五月歿す。（一四四二年―一四九九年）

一八　笑話四則

一、湯漬

大名のもとに客あり。振舞に湯漬出でたり。その席に又客ありぬ。それにも膳をすゑたり。又客來あり。「膳を出せ」とあれども遂に出しかぬる時、物まかなふ者を呼び出し、「何とて手間もいらぬ事のおそきや。湯をえ沸かさぬか」と叱らるる時、手をつかねて、「湯は御ざるが、づけが御座ない」と申したるにぞ、どつと笑ひになりける。

二、朱槍

腑の抜けたる仁に海老をふるまひけるが、赤きを見て、「こ

赤う（赤く）
蒸いた（蒸した）
むかう（むかひ）

れは生まれつきか、また朱にて塗りたるものか」と問ふ。「生得は色が青けれど、釜にて炒りて赤うなる」といふを合點してゐけり。ある侍の馬に乘りたる先へ、二間まなかの柄の朱槍、二十本ばかり持ちたる仲間どもの走るを見、手を打つて、「さても世はひろし。奇特なることや」と感ずる。「何をそなたは感ずるぞ」と問ひたれば、「そのことよ、今の槍の柄の色は火を焚いて蒸いたものぢやが、あれほど長い鍋がようあつたことや」と。

三、數珠

道行ぶりにむかうより來る者を見れば、百八の數珠を首にかけ、高野笠のやうなるを著てあゆむ者あり。うつけ者これを見附け、手を打つて感ずる。「そなたが著たる笠は事の外大きいことや。何としてその數珠をば、うなじに懸けられた」と問ふ。「いや、これはまづ數珠を首に懸けて後に、笠を著て候」というたれば、「とかく物をば聞かいでは」と。

四、留守

借錢を乞ひに幾度人を遣はせども、なすことなし。さらばとて直に行く。これの亭主道善に逢はん」といふ。亭主出でて、「道善は留守に候」といふ。「いやそちは道善ではなきか」。扨ここな人は、亭主の道善が直に逢ひて、『留守』といふをうたがはるるかや」と。（安樂庵策傳―醒睡笑）

ラム
英國の評論家。(西暦一七七五年―一八三四年)

一九　自分の書物

書架を見わたす度毎に、自分はラムの「襤褸を著た老大家」といふ言葉を思ひ出す。

自分の藏書が、どれも古本屋から買つた物ばかりだといふのではない。自分の手に渡つた時には、新しい表紙に包まれた綺麗なのも澤山あつたし、美しい裝釘を施した堂堂たるものも少しはあつたのだ。けれども幾度も引越をして、そのたんびに取扱が手荒かつたのと、それに實をいふと、平生でも本をちやんと整理して置くことに無頓著だつたのとで、一番目立つて綺麗な本でさへ、虐待を受けた痕迹を殘して、甚しいのになると、引越の際、木箱に打ち込んだ釘の爲に、無殘な損害を蒙つたのも二三冊はある。近頃は閑暇と心の平和とを得られたので、だんだん本を大切にするやうに成つて來た。これは「德行は境遇に依つて容易くされる」といふ大眞理の一例證だ。然し實の所、本の頁がバラバラにさへなつてゐなければ、自分は體裁などは餘り氣にしない方だ。

ギボン
英國の歴史家。ローマ興亡史を著はす。(西暦一七三七年―一七九四年)

「わが書棚の本と同じ氣持で圖書館の本が讀める」といふ人があるのを、自分は知つてゐる。自分にはそれが解らない。自分は一冊殘らず自分の本を、香で知つて居て、頁の間に鼻を持つてゆきさへすれば、その本に關聯した一切の事が想ひ出せる。例へばギボンの裝釘の立派な八冊もの、三十年あ

まりの間繰り返し繰り返し讀んだ、――それを開けば必ず高貴な頁の香が、學校で賞品として貰つた時の勝ち誇つた幸福の感を、その儘再び味はせてくれる。或はシェクスピアの全集、それの香は自分をもつと遠い懷かしい過去によみ返らせてくれる。なぜならこの全集は、もと父の物であつたので、讀んでも解りもしない幼い時分から、その一册を書棚から抽き出して來て恭しく頁をめくる事が、特別な恩典として自分に度度許されてゐたからだ。自分は犧牲の生む特有の情愛を以て、わが本をつくづくと打ち眺める。

犧牲――それは客間用の生やさしい意味のではない。澤山な自分の本は、いはゆる「日常の糧」の爲に費さるべき金で

シェクスピア　英國の戯曲家。世界の最大文豪と稱せらる。(西暦一五六四年―一六一六年)
Shakespeare

購はれたものが多いのだ。自分は幾度も露店や本屋の陳列窓の前に立つて、知識慾と飢餓との爭鬪に胸を裂かれる思をした。丁度食事時で、胃袋が旺に食物を要求してゐる際にも、久しく欲しがつてゐた本が、大變安い價で古本屋に出てゐるのを發見し、どうしてもその儘見過すことが出來ないで、足を止めた事も度度あつた。自分の有つてゐるハイネのチバルスは、丁度そんな折手に入れたものだ。それは或店の店先に、澤山なガラクタの中に交つて轉がつてゐたものであつた。當時自分の衣嚢の中に鳴つてゐた六片の金は、ほんたうに自分の全財産であつた。それは晝飯として肉と野菜の一皿とを買ふ筈であつたのだ。手は衣嚢の金を弄り、眼は

ハイネ　ドイツの詩人。(西暦一七九七年―一八五六年)
Heine

店の方を見遣りながら、舗石の上を往きつ戻りつした。二つの慾望が自分の體内で相爭つた。然し可なり永い間躊躇した後、漸く思ひ切つてその本を買ひ取り、意氣揚揚と抱へ込んで宿に歸つた。そしてバタ附の麵麭だけの晝飯を認めながら、貪るやうに本の頁に見入つた。

このチバルスの最後の頁を繰ると、「千七百九十二年十月四日讀了」と鉛筆で記されてあつた。殆ど百年以前のこの本の所有者は誰であつたらう。他には何も記入して無かつたから解らない。自分は、自分と同じやうに、貧乏で且熱心で、丁度自分の遺つたやうに、血の滴でこれを買つて熱心に讀み耽つた貧書生を想像した。（ギッシング―「ライクロフトの手記」譯）

ギッシング　英國の小說家。米國獨逸等にさすらひ流離落魄の極に達し、その悲慘なる經驗を材料とせる小說を著はして名聲を得。（西暦一八五七年―一九〇三年）Gissing

二〇　文字

我が國で普通に用ゐる文字には、漢字と和字と假名との三種類がある。

漢字は支那から傳はつたもので、その字體には、古文、篆書、隷書、楷書、行書、草書の六體があるが、普通印刷などに用ゐるのは楷書である。然るに、等しく楷書といふ中にも、古文、篆、隷より直接に變化し來たつた正體の楷書の外に、いはゆる俗字、および略字と稱するものがある。例へば閒、鄰、敕、竊、攜、牀、脚は正體で、間、隣、勅、窮、携、床、脚はその俗字、邊、澤、聲、亂、實、體、當は正體で、辺、沢、声、乱、実、躰、当はその略字である。俗字や略字も既に

書いた（書きたる）

作つた（作りたる）

久しく慣用されたものは、なまじひに奇古な正體よりも實用上便利であるが、ちやんと書いた書物などを讀む爲には、その正體を知つておく必要がある。

その俗字や略字は、勿論支那の文字の稍變化したものであるが、和字は全く日本で作つたものである。働、凧、凪、峠、躾、軈、込、辻などのやうに、漢字に倣つて新に字形を作つたもの、伽、咄、掟、柾、椿、沖、萩などのやうに、漢字にもこの通りの字形はあるが、全く別の意味に用ゐたもの、および、腺、哩、吋、糎、瓩などのやうに、西洋の醫學や數學の入つて來てから新に作つたもの、これ等は皆和字である。これ亦一概に俗字として排斥すべきではない。

假名も亦漢字から出たもので、大凡奈良朝の末から平安朝の前半にかけて一般に用ゐるに至つたものである。平假名は漢字の草體を更に簡易にしたもの、片假名は漢字の偏、旁、冠などを取つて作つたものである。假名は唯、音を表はすのみで、意味を表はすことのないのが特色で、その性質上、漢字や和字よりは、むしろ羅馬字に近いのである。

佐佐政一

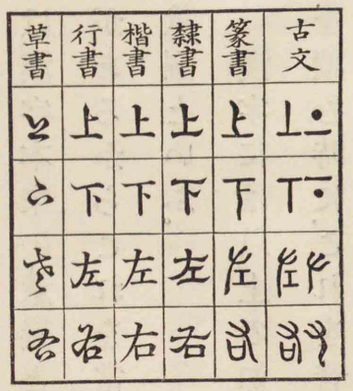
以上三種類の文字の中で、假名は音を表はすのみである。和字は概して訓のみで音はない。然るに漢字には音と訓と二樣のよみ方があつて、その音にも訓にもさまざまの種類がある。

まづ音に就いていふと、行狀、行李、行燈、經文、經書、看經、京都、京師、南京の行、經、京の如きは、それぞれ異なつた音で讀まねばならぬ。その行狀、經文、京都の類はいはゆる吳音で、日本に最も早く傳はつた爲に、佛經に關する語や普通語に頗る廣く用ゐられてゐる。行李、經書、京師の類は所謂漢音で、唐の文化が盛に輸入された時代に、朝廷の奬勵によつて流布したものであつて、儒書は多くこれを用ゐて讀むことになつてゐる。行燈、看經、南京の類は宋以後に傳はつた音で、唐音と稱してゐるが、唐時代の音といふ事ではなくて、ただ唐土の音といふ意である。但、この種類の音は極めて稀に用ゐられるのみである。その他、北京、廣東、上海などの如く、現代の支那音

訛つて（訛りて）

を用ゐることもあるが、これは唯、本邦と交通頻繁な土地の名などに僅に用ゐられるのみである。

この唐音や現代の支那音も、かの地の發音に比べると、既に訛つてゐるのである。吳音は支那の南方の音、漢音は支那の北方の音を傳へたものであるが、いづれも原音のままではなくて、餘程變化してゐるのである。

古文	篆書	隸書	楷書	行書	草書
					

訓にも種種の種類がある。漢字一字に國訓を附したもの、例へば日、月、山、川、草、木の類、漢字二字の熟語に國訓を附したもの、例へば從弟、伯母、海苔、所以の類、或はこれに外來語の訓

を附した隧道、燐寸、喞筒、麪包の類、これ等は皆、漢字本來の意義に隨つて訓讀するものであるから正訓といふ。然るに子、丑、寅、卯、辰、巳の如き、草臥、七夕、團扇、流石に、五月蠅しの如き訓は、漢字本來の意義とは多少異なつてゐるが、相似たところがあるからこれを當てたのであつて、かかる種類のものを意訓といふ。

漢字には以上の如く種種な讀方がある。されば今或漢字を讀む時に、これを音讀すべきか、訓讀すべきか、或は如何なる音、如何なる訓にて讀むべきか、頗る疑はしい場合もないではないが、大抵は國語の習慣や、前後の關係や、送假名等によつて判定することが出來る。その中で、漢語で出來た熟語は、音讀する時は二字ともに音讀し、訓讀する時は二字ともに訓讀するのが正則である。ただし國語と漢語と連合して熟語となる時は、敷地、奥行の如く音訓を交へて讀むことがある。又正則ではないが、重箱、合羽、團子、出立のやうに、音の下に訓を連ねて讀むこともあり、湯桶、小僧、身分のやうに、訓の下に音を連ねて讀むこともある。これを重箱讀、湯桶讀などともいふ。

これを要するに、言語文字のことは一に習慣によつて定まるもので、久しい習慣となつたものは正則でないものでも、亦これに從はねばならぬ。（佐佐政一）

佐佐政一　文學博士。京都の人。江戸時代文學に精しく又俳句を善くす。大正六年十一月歿す。（一五三二年―一五七七年）

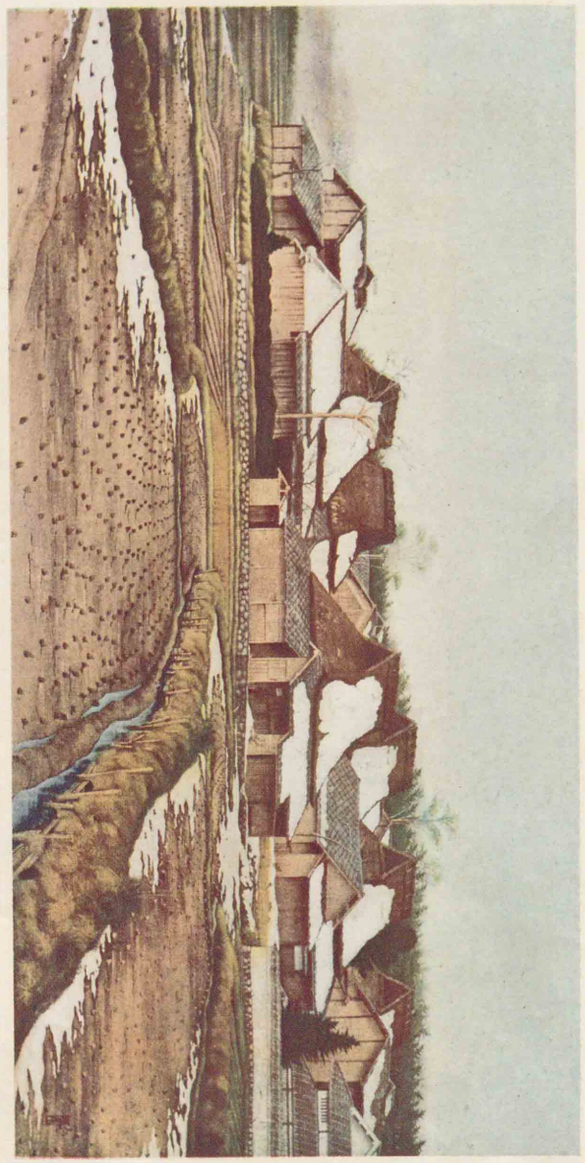
青い。（青き）

二一　早春のスケッチ

一、山上の春

春雨あがりの朝などに、軒づたひに土壁を匍ふ青い煙を眺めると、好い陽氣になつて來たなと感ずる。が、食物の乏しいには閉口する。また油臭い凍豆腐かと思ふと、あの黄色いのが壁につるされたのを見てもうんざりする。淡雪の後の道をびしよびしよ歩みながら「草餅はいりませんか」と呼んで來る女の聲を聞きつけるのは嬉しい。

三月の末か四月の初あたりに、關東の都會の方へ出掛けて、それからこの山の上へ引き返して來る時ほど、氣候の相



（筆　外　靜　延　欠）　雪　殘

咲いて（咲きて）

輕井澤　長野縣佐久郡。

小諸　長野縣佐久郡にある町。信越線の一驛。

違を感ずることはない。東京では櫻の時分に、汽車で上州邊を通ると梅が咲いて居て、碓氷峠を一つ越せば輕井澤はまだ冬景色だ。私はこの春の遲い山の上を見た眼で、武藏野の名殘を汽車の窓から眺めて來ると、「ああ、柔かい雨が降るなあ」と、さう思はない譯にはゆかない。でも輕井澤ほど小諸は寒くないので、汽車でここへやつて來るに隨つて、枯れ枯れな感じの殘つた田畑の間には、勢よく萌え出した麥が見られる。黃に枯れた麥の舊葉と靑靑とした新しい葉とのまじつたのも、離れて見ると中中好いものだ。

四月の十五日頃から、私達は花ざかりの世界を擅に樂しむことが出來る。これまで堪へて居たやうな梅が一時に開

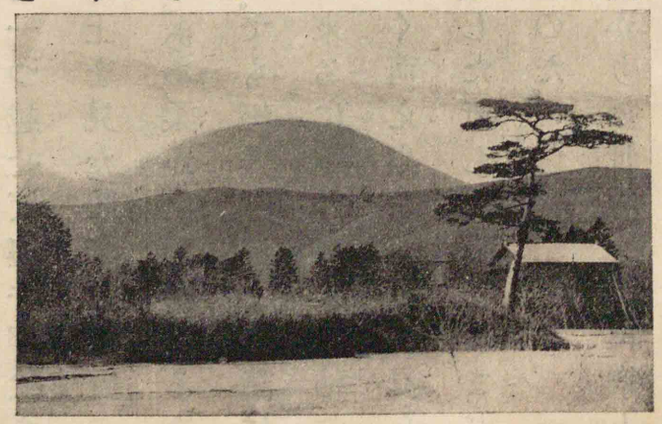
く。梅に續いて直ぐ櫻、櫻から李、杏、茱萸などの花が白く私達の周圍に咲き亂れる。臺所の戸を開けても、庭へ出掛けて往つても、花の香氣の滿ち溢れて居ないところは無い。（島崎藤村――千曲川のスケッチ）

島崎藤村　文學者。名は春樹。長野縣木曾の人。明治五年二月生まる。「春」「家」「新生」等創作多し。

二、小諸の思出

淺間の麓では、あの石ころの多い土地にふさはしい野菜が採れる。その一つに、土地の人達が地大根と呼んで居るのがある。練馬大根などを見た眼にはずつと形も小さく、色もそれほど白くなく、葉を

練馬　東京市の西北郊にある村。大根の名産地。



輕井澤より淺間山を望む

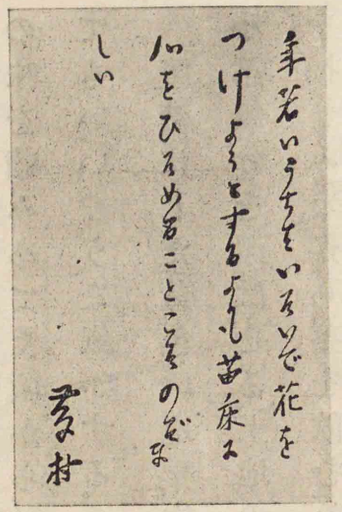
切り落した根元のところは、蕪のやうな赤味がかつた色がある。長い冬のために貯へる頃が來ると、あの大根を洗つて澤庵に漬ける支度をするのが、小諸邊での年中行事の一つのやうになつて居る。小諸の馬場裏の方にあつた私の舊い住居でも、日あたりの好い土壁のところへ、毎年のやうにあの大根を掛けた。私は東京から出掛けて往つて、初めて家を持つた頃には、よくさう思つた、この土地には、こんなあはれな大根しか出來ないのかと。一年暮らし、二年暮らしするうちに、不思議にもあの堅

洗つて（洗ひて）

馬場裏　小諸町の小字の名。

往つて（往きて）

年若いうちはいそいで花をつけようとするよりも苗床に心をひそめることこそのぞましい　藤村



島崎藤村筆

い大根で漬けた澤庵には、嚙みしめれば嚙みしめるほど、何ともいはれない味が出て來た。上州あたりの大根などは、あれに比べるとむしろ水臭いと思ふやうになつた。あの大根の味を嚙みあてた頃から、私の小諸生活は始まつたといつてもいいやうな氣がする。

地梨

鹽漬にした黃色い地梨、梅酢で漬けた紅い寒臘梅なども小諸氣分を漂はせる。土地の人達は茄子、紫蘇の實の味噌漬を摘まみながら茶を飲む。それ程小諸の人は茶好だ。

五箇月もの長い冬を通り越した後、舊い野菜は既に盡き、新しい野菜にはまだ早いといふ四月の頃ほど、食卓の上の單調で寂しい時はなかつた。

嗅いで（嗅ぎて）

「若布はようござんすかねえ。

といふ越後路からの女の若布賣の聲を聞くのもあの頃だ。山椒の芽の青く萌え出す時分になつて、その香の好い燒きたての田樂などを嗅いで見る心持は、山の上の冬籠の經驗のあるものでなければ傳へられない。木の芽が田樂になり、筍が鮨になり、蓬が餅になる頃は、馬場裏の住居も樂しかつた。（島崎藤村―伸び支度）

禍福二つあるにあらず、元來一なり。庖丁を以て茄子を切り大根を切る時は福なり。もし指を切る時は禍なり。水も亦然り。引きて田地を肥すは福なり。溢れて肥土を流すは禍なり。富は人の欲する所なりと雖も、おのが爲にする時は禍これに隨ひ、世の爲にする時は福これに隨ふ。（二宮翁夜話）

二二　一系の天子

○

元日や一系の天子富士の山。　内藤鳴雪

大紙鳶に近よる鳶もなかりけり。　正岡子規

はや鮎や東海のうを背門の蓼。

初冬の竹みどりなり詩仙堂。

内藤鳴雪筆

内藤鳴雪　愛媛縣松山の人。名は素行。大正十五年二月歿す。（二五〇六年―二五八五年）

七轉八起のそれも花の春　鳴雪

正岡子規　愛媛縣松山の人。名は常規。明治俳壇の改革者。和歌、寫生文にも一新生面を拓けり。明治三十五年九月歿す。（二五二七年―二五六二年）

あきかぜにさくらさくなり法華經寺　規

絲瓜咲いて痰のつまりし佛かな。

月の出や皆首たてて小田の雁。

正岡子規筆

湖あをし雪の山山鳥かへる。　角田竹冷

○

早稲は花のあかつきの露笠涼し。　尾崎紅葉

○

口あいて佐渡が見ゆると涼みけり。　夏目漱石

○

角田竹冷　名は眞平。辯護士。大正八年三月歿す。（二五一七年―二五七九年）

尾崎紅葉　明治文壇の雄。名は德太郎。東京の人。多情多恨、金色夜叉等

の作あり。明治三十七年十月歿す。(一八五二七年—一九五六四年)

大野洒竹
醫學士。名は豊太。熊本の人。大正二年十月歿す。(一八五三二年—一九五七三年)

高濱虚子
文學者。松山の人。名は清。明治七年生まる。

河東碧梧桐
松山の人。名は秉五郎。明治五年生まる。近時所謂新傾向の俳句を唱道す。

秋日遊び足りて母ら子守ら　碧

巖谷小波
東京の人。明治三年六月生まる。少年文學に寄與する所多し。

稲妻や堤の果は大安寺　小波

阪本四方太
鳥取縣の人。大正六年歿す。(一八五三三年—一九五七七年)

大須賀乙字
名は績。大正十年歿す。(一八八一年)

荻原井泉水
東京の人。名は藤吉。明治十七年六月生まる。

叩かれて晝の蚊をはく木魚かな。　大野洒竹

○

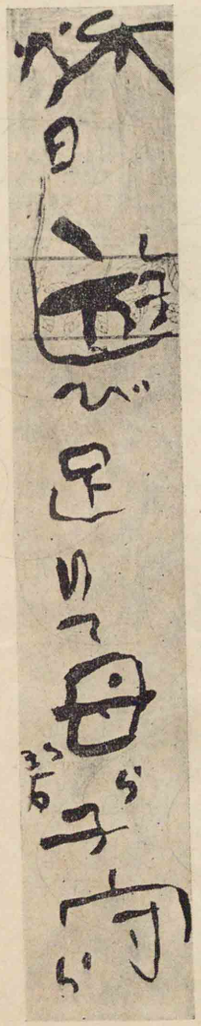
つばくらや三十三間堂の雨。　高濱虚子

○

行く人も枯野の色になりにけり。　河東碧梧桐

○

石垣に鴨吹きよする嵐かな。　巖谷小波



河東碧梧桐筆

櫻咲く國にうまれて男兒かな。

巖谷小波筆

○

語草すでに盡きぬる夜長かな。　阪本四方太

○

落葉ごと寒鮒網に入りにけり。　大須賀乙字

○

戰ぎかはして若葉が喜べる程の風。　荻原井泉水

二三　恩

今日私共御互には、恩といふ感じがよほど薄らいで來ました。併し顧みれば、私共の父母、祖父母、遡つて私共の祖先、廣くわが日本民族、否日本ばかりでない、少くとも東洋民族の間には、古來この感じは非常に厚かつたものであつて、恩とさへいへば、これに對して直に何となく大きな深い、しかもゆかしい暖かい直感を惹き起すと共に、一種嚴肅なる責任意識を持たされたもののやうであります。

恩といふ心持は數量や計算やを超越して居ます。私が今日安らかに世を送る事の出來るのも、人間らしい御勤の出

來るのも、全く主人の御恩であるから、勤めねばならぬ勵まねばならぬといふ、これが恩の感じを有する雇人の心持である。又、會社の盛大になつたのは決して自分一個の力ではない。皆が汗や膏で働いてくれる御蔭であるから、酷く取扱つてはならぬ親切にせねばならぬといふ、これが恩意識のある主人の心持である。其處に恩の意識があれば痛ましい打算づくの爭が止んで、而も總ての事務が圓滿に進歩して行きませう。家庭に在つての親と子、地方に在つての地主と小作人、教育上の教員と學生、官署に在つて官吏と人民とについて考へて

島地大等

みても、同樣に申されるのであります。

親の恩、友人の恩、師匠の恩、天子の恩、その他すべて恩を蒙つたといふ意識には、唯有り難い、お蔭樣でといふ無制限の感謝が起るばかりで、其處には何の計算も容るべき餘地がないのであります。百圓の金がいるが、手許には五十圓だけしかない、もう半分なくては間に合はぬ、どうしようと困つて居る時、隣の友人がその五十圓は私が貸しませうと言つて持つて來てくれた。この時のその人の感じはどうでありませう。百圓の中五十圓借りたのだ、皆借りたのなら十分頭を下げるのだが、半分だから半分だけ頭を下げて禮を言はうといふやうな、そんな計算的の感じがどうして浮びませう。唯萬事を忘れて有り難い忝いと思ふ外、何の餘念もありますまい。この時の心持が卽ち恩の計量を離れた味でありませう。

唐の魏徵といふ人が歌うた詩の中に「人生意氣に感ず、功名誰か復た論ぜん」といふ句がありますが、實に面白い語であつて、よく恩意識の特徵を發揮してゐます。この詩は太宗皇帝が自分を信任して下さる所のその意氣に感じて見ると、名譽も利益もいらない、あなたの爲には水火の中をも決して厭ひませんといふ意を歌つたもので、誠に恩意識の數量を離れて居る心持を、實に鮮かに示して居ます。

（島地大等――思想と信仰）

魏徵　字は玄成。唐太宗の名臣。鄭國公に封ぜらる。人生意氣に感ず云々　述懷と題する詩中の句。

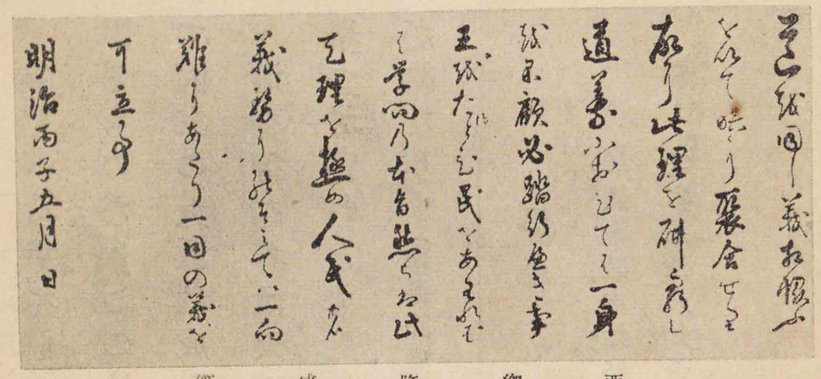
島地大等　越後の人。元宗教大學講師、東京帝國大學講師。昭和二年七月歿す。（一五三七―一五八七）

二四　南洲遺訓

事大小となく、正道を踏み、至誠を推して一事の詐謀をも用ゐるべからず。人多くは事のさし支ふる時に臨み、策略を用ゐて一旦その差支をとほせば、後は事宜次第、工夫の出來るやうに思へども、策略の煩ひ屹度生じ、事必ず敗るるものぞ。正道を以てこれを行へば、目前には迂遠なるやうなれども先に行けば成功は早きものなり。

人を相手にせず天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めずわが誠の足らざるを尋ぬべし。己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出來ぬも、事の成らぬ

道を同し義相協ふを以て暗に聚合せり、故に此理を研窮し、道義におひては一身を不顧必踏行べき事。王をたつとび民をあわれむは學問の本旨、然らば此天理を極め、人民の義務にのぞみては一向難にあたり一同の義を可立事。明治丙子五月日



西郷隆盛筆

も、過を改むることの出來ぬも、功に伐りて驕慢の生ずるも、皆みづから愛するが爲なれば、決して己を愛すまじきものなり。

過を改むるに、みづから過てりと思ひつかば、それにてよし。その事をば棄てて顧みず、直に一歩踏み出すべし。過を悔しく思ひ、取り繕はんとて心配するは、茶碗を割りたる時、その缺を集めて合はせて見るとおなじ事にて、詮なきことなり。

命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。

道を行ふ者は、天下擧つて毀るとも足らずとせず、天下擧つて譽むとも足れりとせず。みづから信ずること篤きが故なり。（西郷隆盛）

偶感　西郷南洲

幾歴辛酸志始堅、丈夫玉碎愧甎全、
我家遺法人知否、不爲兒孫買美田。

擧つて（擧りて）

西郷隆盛　南洲と號す。鹿兒島藩士。明治維新の元勳、明治十年九月官軍に抗し城山に死す。（二四八七年—二五三七年）

松下村塾　山口縣阿武郡松本村なる吉田松陰の塾。

狂介　山縣有朋の幼名。

俊介　伊藤博文の幼名。

高杉晉作　勤王家。山口藩士。名は春風、字は暢夫、東行と號す。慶應三年四月歿す。（二四九八年—二五二六年）

木戸孝允　維新の元勳。舊山口藩士。明治十年五月薨ず。（二四九五年—二五三七年）

二五　松下村塾を訪ふ

や狂介、お俊介とまき垣の

この蔭にして手を握りしか。

阿武川の中洲になつてゐる萩の街、そこに久阪玄瑞、高杉晉作、木戸孝允、山縣有朋などの舊宅が點在してゐる。

東萩に渡れば、東の方に毛利家累代の菩提所、四大夫、十二烈士の墓處とある東光寺を背にして、松陰神社、松下村塾、松陰幽居の家などが一郭をなしてゐる。

社前には、松陰先生の臺柄と稱せられる米つき臺が保存せられてある。安政五年六月二十八日、先生が村塾から在京

四大夫
益田親施、福原元僩、國司親相、清水親和。
十二烈士
周布政之助、竹内正兵衞、中村九郎、佐久間佐兵衞、宍戸左馬介、渡邊内藏太、楢崎彌八郎、山田亦介、大和國之助、前田孫右衞門、松島剛藏、毛利登人。
安積艮齋
岩代の人。漢學者。萬延元年十一月歿す。(二四四五年—二五二〇年)
下田
靜岡縣賀茂郡。
杉家
松陰の實家。

の久阪義助に贈つた書中に、

隔日左傳、八家會讀、勿論塾中常居、七つ過會讀終る、それより畑又は米春與ニ在塾生同レ之、米春大得ニ其妙ヲ、大抵兩三人同じく上り、會讀しながら春レ之、史記など二十四五葉讀む間に、米精げをはる。また一快なり。

下村海南

とある。松陰先生は二十三歳で安積艮齋、佐久間象山に從うて學び、ついで安政元年二十四歳の時、伊豆の下田にて米艦へ搭乘を計り、事破れて江戸の獄に下り、ついで萩の野山の獄に遷され、後免されて杉家に幽せられた。幽囚中、家學山鹿流兵學教授のために門人の引見を許

間部詮勝
越前鯖江の城

され、松下村塾を開いた。

兵學研究に名を借りて來たつて學ぶ者が多く、八疊敷の小舍では狹隘なので、門人等は鋸をとり、鏝を手にし、土石を運び、地を均し、壁を塗り、家根を葺き、十疊半の一室を建て增したといふ、その村塾の前に倉庫がある。先生は刻苦精勵、寸陰を惜しみ、行住坐臥、講話抄錄を絶たず、その倉庫に納むるところは殆ど擧げて皆書册である。

先生の著書は幽囚錄、回顧錄、幽室文稿、二十一回叢書をはじめ、二十九歳で果てられた生前の作品實に百二十餘册に上つてゐる。

先生は、老中間部詮勝要擊の事に坐し、安政五年十二月投

主。幕府の老中。明治十七年卒す。（一四六二年―一二五四年）

獄の命下り、翌六年七月江戸の獄に入り、死罪に斷ぜられた。

親を思ふ心にまさる親心
今日のおとづれ何と聞くらむ。

は、十月二十日認めた永訣の書に記された歌であり、

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも
とどめ置かまし大和だましひ。

は、獄死の前二日、十月廿六日留魂錄に記された辭世の歌である。その留魂錄四つ折の塵紙が六七枚、ガラス戸を隔ててかすかに見える。今日は何とかいふ人がゐないといふので、ガラス戸はどうしても開けてくれぬ。

立ち去りかねるガラス戸の内、留魂錄と竝んだ先生の抄

並んだ（並びたり）

前原一誠　舊山口藩士。明治九年亂を起して斬らる。（一二五三六年）

野村靖　舊山口藩士。子爵。内務大臣、樞密顧問官に歷任す。明治四十二年一月薨ず。（一二五〇二年―二五六九年）

錄の中に、松葉に木の子を添へた繪に、

名月に香は珍しき木の子かな。

と題したのが見える。先生が漢詩と短歌との外に、かうした俳味にも惠まれてゐた事は、いかにも嬉しい。十八疊の松下村塾は、安政三年七月から五年十二月の先生の入獄まで、わづか二年間しか開かれなかつたが、維新回天の大業を仕上げた志士高杉晉作、久阪玄瑞、木戸孝允、前原一誠、野村靖、品川彌二郎、山田顯義、山縣有朋、伊藤博文などは皆この村塾から輩出した。

先生のあとに殘つて明倫館舍長となり、奇兵隊長となり、内は俗論黨と戰ひ、外は鄰藩、幕府、外國を相手に、砲彈と言論

品川彌二郎　舊山口藩士。子爵。明治二十四年内務大臣に任ぜらる。明治三十三年一月薨ず。（一二五〇三年―一二五六〇年）

山田顯義　舊山口藩士。伯爵。陸軍中將。明治二十五年十一月薨ず。（一二五〇八年―一二五五二年）

とによつて折衝した門下生高杉晉作も、先生と同じ二十九歳で果てた。

昔ながらのまき垣に添ひ、柿の木のもとをめぐり、村塾と幽囚の室とのあたりを低徊してゐると、空に聲がある。

「お前はもう何歳になる。

「僕はもう五十二歳、あと六歳で先生の壽命の倍になる！。

「いや人間の働くのは二十歳を越してからぢや。松陰先生は正味九年働いて亡くなられた。お前などは五十二から二十さしひいて三十二年、四倍近い歳月を過して來たのだ、……只むだにな。

空の聲がつづく。

働いて（働きて）

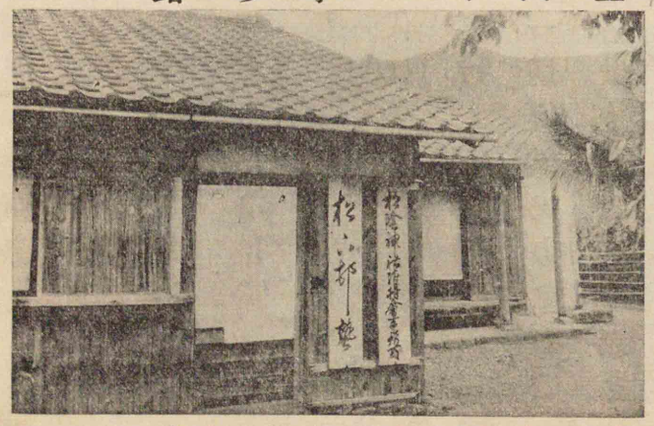
食つて（食ひて）

下村海南　法學博士。名は宏。東京朝日新聞記者。

「維新の志士は國禁を潛り潛り不完全極まる學問をなし、三十歳足らずで亡くなられたが、あれだけの仕事をされた。今の連中は大手を振つて完全な學問を修めてゐるが、仕事は出來ずに、ただ年だけ食つてゆくやうだ。所？、時？、人？。

明倫館のあとに建てられた小學校からは、完全な教育を受けつつある男の子、女の子が今三三五五家路をさして歸つて行く。

（下村海南――四番茶）



松下村塾

賴家公
賴朝の子。北條時政のために、修禪寺に幽殺せらる。（一八四一年―一八六三年）

尼將軍
源賴朝の室平政子。（一八一七年―一八八五年）

二六　修善寺だより

拜啓。昨日は雨の日ぐらし無聊に困み、夕景始めて傘さして、川向の小山なる賴家公の墓を拜し申し候。見るもいたはしき荒涼たる藪蔭に、空しく一片の殘石を留めて慘禍を生前に極め、恥辱を末代に曝され候こと、如何なる前世の御宿業にかましましけんと、低回去るに忍びかね候。墓畔に尼將軍建立の一切經堂あり。これこそ公の奥津城にして、現在の五輪塔は後人の御墳無きを慨きて、假に建てたるものなりとの考證これあり候。されば右の經堂の大破、安置せる丈六佛の朽廢は、最も

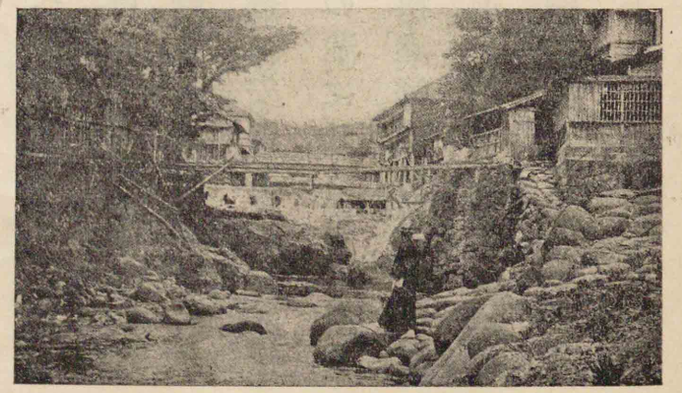
蒲冠者
源範賴。兄賴朝の忌諱に觸れ、建久四年修禪寺に幽殺せらる。（一一八五三年）

修禪寺
僧空海の開基、後改宗して禪宗となる。

獨鈷の湯
修善寺の中央を流るる桂川の中に涌出す。

懷古の暗涙を催さしめ候。蒲冠者の墳はいまだ弔はず、すぐ鄰に候へども修禪寺にも參詣致さず候。追つて一見の上申し上ぐべく候。

この日は一日閉居の餘、入浴七度に及び、剩へ連夜の按摩に全身綿の如く相成り、疲勞度に過ぎて徹夜眠る能はず、黎明始めて交睫して、覺えず十一時に至り候處、快晴の天氣、玲瓏玉の如くなるに踊躍して、獨鈷の湯の撮影を試みんと逸り候程に、過りて三脚柱の腰部をへし折



修　善　寺

り、尠からず當惑致し候へども、應急の手術を施し、やをら湯の上流の淺瀨に踏み入り、ピントをあはせ候が、ひまどり候程に、水中の赤脚寒に堪へず、しかも來浴者頻頻として、目障の邊に著物を脱ぎはなしなど致し、始終ピント安を妨害致され、技師の難澁これに過ぎず候ひき。辛うじて一照致し候へども、印畫の安否甚だ心元無く存じ候。それより川下なる廣機の瀧に赴き、馬車屋の前なる阪道の中段に機械を立て候處、崕下の馬の湯に上下する四足の往來ありて、屢ば道を讓るべく餘儀無くせらるるため、倥偬の間に速寫機を拈りて立ち退き申し候。

得候こそ―致し候へ

尾崎紅葉　小説家。名は德太郎。東京の人。紅葉全集六卷を遺せり。明治三十七年十月歿す。（一五二七年―一五六四年）

この寫眞修行の前、人の需に依りて少少麤筆を揮ひ申し候。然るに「僻境の惡箋用ゐるべからず」など不足を申し候處、亭主才覺して紙門に貼りのこしの地紙を裁ちて持ち來り候に、居然たる檀紙金砂子の好短册を得候こそ風流この上なく感心致し候へ。

二日の雨にて椎茸出來候へば、味醂醬油の附燒に致し候。今は春子のすがれにて、肉薄く氣も亦微かには候へども、山廚の佳味侮るべからず、平椀中、常に幅する所の陣笠の如き物とは箸を同じうして論ずべきにあらず候。胃病の人、毎に餓鬼の如く候。幸に食談の愚を咎め給ふことなかれ。草草不盡。（尾崎紅葉―紅葉書簡）

會うて（會ひて）

二七　春宵

山里の朧に乘じてそぞろあるきする。觀海寺の石段を登りながら、「仰數春星一二三」といふ句を得た。余は別に和尚に會ふ用事もない。會うて雜話をする氣もない。偶然と宿を出でて、足の向くにまかせてぶらぶらするうち、ついこの石段の下に出た。暫く「不許葷酒入山門」といふ石を撫でて立つて居たが、急に嬉しくなつて登り出したのである。

石段を登るにも骨を折つては登らない。骨が折れる位ならすぐ引き返す。一段登つてたたずむ時、何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなつた。默然とし

鎌倉五山　建長、圓覺、淨智、淨妙、壽福の五禪刹をいふ。

鋭い（鋭き）

てわが影を見る。角石に遮られて三段に切れてゐるのが妙だ。妙だからまた登る。かうして、余はとうとう上まで登りつめた。

石段の上で思ひ出す。昔鎌倉へ遊に行つて、所謂五山なるものをぐるぐる尋ねて廻つた時、たしか圓覺寺の塔頭であつたらう、矢張こんな風に石段をのそりのそりと登つて行くと、門内から黄色な衣を著た頭の鉢の開いた坊主が出て來た。余は上る。坊主は下りる。すれ違つた時、坊主が鋭い聲で、「何處へお出でなさる」と問うた。余は只「境内を拜見に」と答へて同時に足を停めた。坊主は直に「何もありませんぞ」といひ捨てて、すたすた下りて往つた。あまり洒落だから、余は少し

立つて（立ちて）

く先を越された氣味で、段上に立つて坊主を見送ると、坊主はかの鉢の開いた頭を振り立て振り立て、遂に姿を杉の木の間に隱した。その間、かつて一度も振り返つた事はない。成程禪僧は面白い。きびきびしてゐるなと、のつそり山門を這入つて見ると、廣い庫裏も本堂も、がらんとして人影はまるで無い。余はその時に心から嬉しく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんなに洒落に人を取り扱つてくれたかと思ふと、何となく氣分が晴晴した。禪を心得てゐたからといふ譯ではない。禪のぜの字もいまだに知らぬ。只あの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。

「仰數春星一二三」の句を得て石磴を登り盡した時、朧に光る春の海が帶の如くに見えた。山門を入る。

甃んで（甃みて）

大津繪　近江の大津追分にて賣る一枚摺の浮世繪。江戸時代、浮世又平に始まる。

石を甃んで庫裏に通ずる一筋道の右側は、岡躑躅の生垣で、垣の向は墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い處で幽かに光る。數萬の甍に數萬の月が落ちたやうだと見上げる。何處やらで鳩の聲がしきりにする。棟の下にでも居るらしい。氣のせゐか廂のあたりに白いものが點點と見える。糞かも知れぬ。

雨垂落の處に妙な影が一列に竝んでゐる。木とも見えぬ。草では無論ない。感じからいふと、大津繪の鬼の念佛が、念佛をやめて踊を踊つてゐる姿である。本堂の端から端まで、一列に行儀よく竝んで踊つて居る。朧夜にそそのかされて、鉦

も撞木も奉加帳も打ち棄てて、誘ひ合はせるや否やこの山寺に踊に來たのだらう。

近寄つて見ると、大きな覇王樹である。高さは七八尺もあらう。絲瓜ほどな青い胡瓜を杓子のやうに壓しひしやげて、柄の方を下に、上へ上へと繼ぎ合はせたやうに見える。あの杓子がいくつ繋がつたらお仕舞になるのか分らない。今夜のうちにも廂を突き破つて屋根瓦の上まで出さうだ。あの杓子が出來る時には、何でも不意にどこからか出て來て、ぴしやりと飛び付くに違ない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちに段段大きくなるやうには思はれない。杓子と杓子との連續が如何にも突飛であ

る。こんな滑稽な樹はたんとあるまい。しかも澄ましたものだ。

石甃を行き盡して左へ折れると庫裏へ出る。庫裏の前に大きな木蓮がある。殆ど一抱もあらう。高さは庫裏の屋根を抜いてゐる。見上げると頭の上は枝である。枝の上も亦枝である。さうして枝の重なり合つた上が月である。普通、枝があ重なると、下から空は見えぬ。花があれば猶見えぬ。木蓮の枝はいくら重なつても、枝と枝との間はほがらかに隙いてゐる。木蓮は樹下に立つ人の眼を亂すほどの細い枝を徒らには張らぬ。花さへ明かである。この遙なる下から見上げても、一輪の花ははつきりと一輪に見える。その一輪が、どこま

抜いて（抜きて）

隙いて（隙きて）

で簇つて、どこまで咲いてゐるか分らぬ。それにも關はらず、一輪は遂に一輪で、一輪と一輪との間から薄青い空が判然と望まれる。花の色は無論純白ではない。白いのは寒過ぎる。專らに白いのは殊更に人の眼を奪ふ巧みが見える。木蓮の色はそれではない。極度の白さをわざと避けて、暖かみのある淡黄に、奥床しくもみづからを卑下してゐる。余は石甃の上に立つて、このおとなしい花が累累とどこまでも空裏に蔓る樣を見上げて、しばらく茫然としてゐた。眼に落つるのは花ばかりである。葉は一枚もない。どこやらで鳩がやさしく鳴き合うてゐる。

（夏目漱石――草枕）

合うて（合ひて）

坦庵　江川太郎左衞門。名は英龍、字は九淵、蘭學を修め、砲技に長ず。海防の事に與りて功あり。安政二年正月歿す。（一二四六年―一二五一年）

象山　佐久間修理。

韮山笠

二八　坦庵と象山

まづ太鼓の音が聞える。續いて喇叭の聲、廻れ右へ一二一二なぞといふのが段段近く聞える。處は天城山の一部。韮山の代官江川太郎左衞門英龍が、兵式教練を兼ねて、所謂農兵を引率して山獵に出たところである。銃は舊式の劍つき鐵砲。江川太郎左衞門は年齡五十餘歲。打裂羽織、裁附袴、極質素な服裝。韮山笠を戴き、麓まで騎馬で來たのらしく、鞭を持ち、下官でもあり門弟でもある二壯士澤野某、湯ヶ島某を從へ、農兵共に號令しつつ登つて來る。登りをはると、とどまれ」と號令する。一同よろしく佇立する。つづいて「休め」の號令につれて、農兵らは肩にしてゐる銃をおろし、それぞれよろしく寛ぐ。太郎左衞門はよき所に床几を立てさせて腰をおろす。澤野と湯ケ島とはその左右に蹲踞する。この途端、下手より太郎左衞門の家の若黨甲登り來たり、太郎左衞門の前に膝まづいて、

甲　「ハツ、申し上げまする。

江川「何だ？。何事か出來いたしたか。

甲　「只今松代藩の佐久間修理と申さるる御仁が御休息所へ參られまして、御面會が願ひたいと申されまする。

江川「なに、佐久間修理が？。して汝は何と申した。

甲　「只今山上にて御狩獵中と申しましたら、『それは存じの上で參つた。われらは先年暫時御門下に列しをつたる者。このたび公務を帶び、豆相沿岸の檢分に罷り越した る所、この山にて御獵と承はり、幸の折柄とお見舞申した』と申されまする。いかが計らひませうや。

江川「折角の事だ。苦しうない、こちらへ案内しろ。

甲　「ハツ。（と行かうとする）

湯ヶ島「先生、失禮ではございますが、佐久間氏に御對面はいかがでございませうか。あの仁は先年失禮にも先生の御教授振を評して、『肝腎の砲術を第二にして、只山獵山獵と、毎日のやうに山や野を驅け廻るのは、飛脚の修行にしか相成らん』と誹謗いたした上、下曾根どのへ間もなく入門仕つた表裏者ではございませんか。

江川坦庵

下曾根　名は金三郎。幕府の鐵砲方。

澤野「そればかりではございません。噂に依りますれば、彼の仁、例の昨今品川沖にお築立中のお臺場を、偏に先生の獻議の如くに申し做し、『あのやうな兒戲に等しいものが、いざとなつて何のお役に立たうぞ』と頻つと誹謗い

たしまするやに承はり及びました。今日の推參も、或は何か惡言の種を探しに參つたものかも圖られません。手前も御對面は御無用かと存じます。

江川「いや、いや、さうでない。あの仁は當今稀有の傑物だ。それだけにまた、高く自ら持して、苟も人に下らぬといふ倨傲の癖もあるのだ。他流試合が修行の第一であるやうに、異なつた考を持つてゐる者にぶつつかるのが、何事に附けても有益だ。……こちらへ案内しろ。

これにて甲は元來た方へ去る。

佐久間はどちらかといふと學者肌で、理には至つて精しいが、實技には長じない方だ。が、しかし傑物には相違

ない。……さ、もう一巡調練をしようぞ。……（と農兵らに向つて）氣を附けい！。

と、これにて門弟はじめ農兵一同姿勢を正す。これより「肩へ銃！」云云の號令、式の如くあつて、「進め！」「廻れ右へ！」「停れ！」等いろいろあつて、どど彈込を命じ、覘を附けさせ、「撃て！」の號令と共に、或一方の凹所へ向けて一齊射撃をさせること宜しくある。

佐久間象山

この途端下手凹所より佐久間修理、總髪、齡四十位。打裂羽織、野袴、大小。笠を手に持ち、一人の僕に新式の元込銃を擔がせて、先刻の江川の若黨に案内せられて登つて來る。太郎左衛門はかくと見て、農兵らに「休め！」の號令を下しおきて、佐久間の近附くを待つ。

佐久「存外にも御疎闊に打ち過ぎましたる段、平に御容赦を願ひまする。まづ以て御健勝の體、祝著に存じます。この度公務を帶び當地方へ參りましたる所、恰も御山獵と承はり、よい折柄と存じ、失禮を顧みず推參致しました。

江川「や、これはお珍しい。まづ貴殿にも御無事で大慶に存じます。ええ、どうやらこの豆相沿海の防備を御視察とやら承はつたが、さやうでござるかな。

佐久「はい、如何にも。まづ浦賀、下田を第一といたして。

江川「それは御苦勞な儀で。

この時、佐久間は澤野、湯ヶ島とも舊面識であるらしく、互に會釋することある。

浦賀　神奈川縣三浦郡。
下田　靜岡縣加茂郡。

佐久「さて、御山獵中お妨とは存じましたなれど、少少御覽に供したい物がござつて、

と僕を顧みて、携へて來た元込銃を受け取り、

ええ、この品は拙藩の鐵砲鍛冶片井京助と申す者が、多年苦心の末、本年に至り、やうやく成功に及びましたる所の新工夫の鐵砲でござる。實はこの器の製作には手前も少からず心力を勞しましたこと故、かたがた高覽に供し、御鑑定を煩はす次第でござる。

と、銃を江川に見せる。江川受け取つて、

江川「ほほう、如何さま、これは曾て見ませぬ珍しい製作。して效用は？」

と、佐久間へ返す。佐久間受け取りて、

佐久「御覽下され。これは西洋傳來の尋常の鐵砲とは違ひ、彈を込めまするに、一一銃を逆さにいたして込めるやうな迂遠なる事はしませいで、すぐにかくの如く、（と取り扱つて見せて）元込にいたすのでございます。それゆゑ名づけて「元込銃」と申し、在來のよりは二三倍も早く彈込が出來ますから、實戰上の利益は莫大でございます。若しお氣に召さば獻じたく存じ、持參

まをし（まうし）

調練

いたしました。

江川「成程、これは巧みな製作で便利千萬。御工夫の程敬服いたした。

佐久「時に先生には如何おぼしめさるる？。外夷どもの跳梁、年年次第に甚しく、就中イギリス夷は、ともすると專らこの豆相沿岸に乘り込み來たらんとする氣配がございます。然るにこの時に當り、邊防の爲に備へ附けられたる大砲は僅に一百門、夷船二艘に當るにも足らぬ上に、毎砲の彈丸は僅に十箇、中には砲ばかりで彈の準備の無いのもあると承はる。これほど心元ない事はございません。手前慨歎の餘、昨年例のペウセルの兵書にもとづき、大

ございません（ございませぬ）

あらうか
（あらんか）
（あらむか）

砲六門を鑄造せしめ、藩府松代の平野に於いて試發をいたし、相當の成績を擧げましてござるが、恐らく本邦にて洋風の大砲を鑄造仕つたのは、これが始めてであらうかと存じまする。なれども外夷どもにして、萬一にも上陸に及ばば、とかく小銃の戰とも相成りませうが、その小銃とても、在來のは迂遠至極の物、とても實戰の役には立ちません。そこでこの數年來肝膽を碎き、やうやくかやうな品を工夫し得たのでござるが……。

と、昂然として如何にも自慢さうに語りつづける。

湯ヶ島こらへかねた體で、

湯　「ああいや、佐久間殿しばらく。では在來の鐵砲はすべて

迂遠至極の物で、とても實戰の役には立たんと仰せられまするか。

佐久「いかにも。いざとならば、殆ど無用の長物でござりませう。

湯　「なに、無用の長物？。では江川先生の多年の御教練をも、同じく無用の長物と仰せられまするか。

佐久「いや、教練を無用だとは申さないが、武器はやがてお改めにならねば叶ひますまい。御教練の方式とても、武器が改まれば自然とお改めなさらねばならぬこともござりませうて。

湯　「では先年批判あつた如く、『先生のこの方式は飛脚の修

行も同然だ』と仰せらるるのでござるか。」

江川「ああこれ、何事でござる？。お控へなさい。……いや佐久間殿、お說一一御尤でござる。成程まづ武器を完全に致すのが當今の急務でもござらうが、いざ實戰となると、大切なのは銘銘の氣魄膽力、次は實技の練熟でござる。突然に事が生じた場合に、魂が顚倒するやうでは、如何な利器も用をなしません。そこで變に處して慌てぬ稽古が必要でござる。同じく稽古と申しても、死物の的を掛けておいて、覘つて擊つばかりの稽古では、いざといふ時の役には立ちません。だから拙者は、かやうに毎毎山獵をさせます。どんな猛獸が、いつどこから飛び出してまゐらうと、立所に擊ち止める稽古をさせるのでござる。この變に處する覺悟といふよりも、練習が積んでをらぬと、利器も存外無用の長物となりますて。

ござらうが（ござらんが）

澤「全く先生のお說の如く、とかく世の中の事は理窟ばかりでは通りません。利器か鈍器かは、實證を見屆けてから定まることでございませう。

湯「さやう、さやう。それには幸のこの山獵、佐久間殿のお手練の程を、その御自慢の元込銃とやらで拜見いたしたいものでござる。

と嘲弄するやうにいふ。

佐久（むつとした體で）「折角のお需だが、手前苦心のこの鐵砲は、

御國に仇をなす洋夷どもを膺懲するための大切の武器でござるから、かりそめの遊戯などに使用することは堅くお斷り申す。

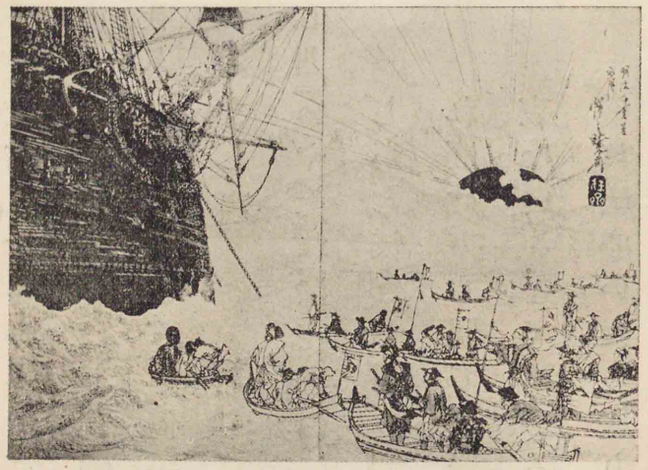
湯　「何と仰せらるる？。然らば江川先生の多年のこの御教練を、遊戯だと仰せらるるのでござるか。

江川（制して）「ああこれ、又しても佐久間殿に對し失禮でござるぞ。……いや、自分は佐久間殿といろいろ折り入つて御談合申したい事があるから、お手前はその間、自分に代り農兵どもを引きつれ、西谷の方でもう一練習試みて下さい。兎ぐらゐは獵られませうぞ。

湯　「かしこまりました。

モルチール臼砲。
ホウイッツル榴彈砲。

と、よろしく佐久間にも會釋することあつて、農兵らを率ゐ一方の凹所へおりて行く。あとには江川と澤野と佐久間主從だけ殘る。澤野は銃を携へてゐる。



黑船來（曉齋筆）

江川「先刻ペウセルの兵書によつて大砲數門、新に御鑄造とのお話であつたが、それは例の加農砲でござるか。

佐久「いや、加農は只一門だけ、別にモルチールを三門、ホウイッツルを二門鑄させました。さうして加農を地砲、モルチールを天砲、ホウイッ

ツルを人砲と名づけ、以後はこの譯名によつて天下に流布さする心得でござる。

江川「砲身にはやはり青銅をお用ゐでござらうな。

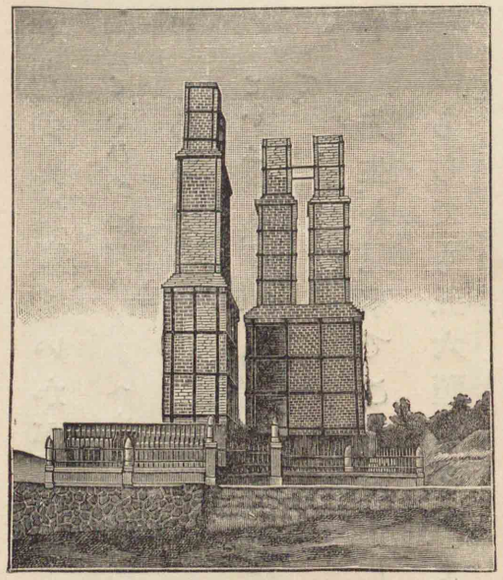
佐久「さやうでござる。但手前は銅百分に錫十一分半を加へました。

江川「いや、それは在來のに比して大分の進境ではござるが、しかし彼方が例の鋼鐵の大砲を以て攻め寄するとすれば、此方も同じ利器を以てこれに當らねば、勝利は覺束ないことでござる。實は自分はこの數年來、專らこの儀に潛心いたし罷り在るので。

佐久「手前とてもそれに心附かんではござらんが、鋼鐵を溶

かす法は洋夷が祕中の祕、これを知る道はござらん。

江川「いや、必しも無いとは申されん。實は手前、小規模には既に屢ば成功も致してござるが、いまだ……。



反射爐

といひかける。この途端、遠くにて一齊射擊の響が聞える。と、澤野は一方の凹所を見やりて、

澤「おお、先生、あそこへ兎が何疋も飛び出して參りました。

江川「なるほど、その銃をこれへ。

澤　「ハツ。

と銃を江川へ渡す。江川はそれを取りて、

江川「御免。貴殿もいかが。

といひつつ覘ひもあへず一發放つ。佐久間は冷然として見てゐる。

澤　「ああ、中りました。

といふうち、以前の湯ヶ島は、大兎を一疋提げて一方の凹所から登つて來て、

湯　「先生、お見事でございました。中中大物でございます。あちらでも五六頭しとめました。

このうちに農兵らも獲物を携へて追ひ追ひ登つて來て、よろしく整列する。

湯ヶ島は先刻の遺恨がまだあるらしく、澤野に向つて、

ございい（ござり）

「お慰みにとも存じて、わざとこなたへ向け三頭まで狩り出しましたのに、佐久間殿のあの元込銃とやらのお手際を拜見することの出來なかつたのは殘念でございつたなあ。

と當てこするやうにいふ。佐久間それをじろりと見やつて、

江川坦庵筆

佐久（江川に）「さすがは多年の御鍛錬、あざやかな事でございつたし。しかし獣類は只一二疋で、只管逃げるのみのもので

ござるから、ただちに第二發第三發と續けずともようござるが、雲霞の如く競ひ來る洋夷どもを擊ち退けるにはいかがでござらうか。手前はこの元込銃に尙この上の新意を凝らして、迅發銃とでも命名すべき西洋にも類のない鐵砲を造らうと工夫中でござる。いづれまた程なく携へて御訪問申すでござらう。今日はこれでお暇申す。

江川「さやうでござるか。途中とは申しながら、これはまたあまりのお匆匆、何のもてなしもいたさんで。では御機嫌よう。

と雙方よろしく會釋ありて、佐久間主從はもと來た方へ去る。

藤田

藤田東湖、名は彪。安政二年十月歿す。（一八五五年）

全。うし（全くし）

湯「先生あまりと申せば高慢な無禮な仁でござる。

江川「水戸の藤田にも次ぐ英物だが、雅量の乏しいのが疵だ。先年は心附かなんだが、今見ると不思議にも劍難の相が見える。或はその終を全うしないかも知れん。……大分日も傾いたなう。もう一調練して歸らうか。ああ、兵は凶器だが是非に及ばぬ。戰を好めば必ず亡び、戰を忘れれば必ず危し。かうしてお互に兵を練るのは、畢竟ずるに戰を以て長く天下の戰を止めたいばかりにするのだ。お手前たちも常にこの志を忘れまいぞ。……氣を附けい！。

と號令式の如くよろしくありて先立つ。一同肅肅として從ふ

中等國語讀本

新修二版 卷四 終

（坪内逍遙——わがページェント劇

ン	穏	國
オ フア	押	鴨
ト	嘔	嘔欧謳鴎嘔
ケ フ	夾	協脇(脅)
	侠	劫
	挾	怯
	狹	業
	峽	
	鋏	
	頬	
	莢	
	篋	
	蛺	
カ フ	合	甲
	洽	岬
	恰	匣
	蛤	胛
	袷	狎
	閤	
コ ウ	口	工
	扣	功
	叩	后
	句(勾)	垢
	苟	詬
	拘	近
	鉤(鈎)	攻
	空	虹
	控	紅
	倥	肛
	控	訌
	候	汞
	候	貢
	喉	鴻
	猴	
	洪	閧
	吼	鬨
	孔	構
	溝	講
	媾	購
	篝	巨
	恒	姮
	公	厚
	後	弘
	興	寇
	肯	肱
	薨	
カウ	江	講
	巧	
	項	
チ ウ	中	仲
	沖	忡
	忠	衷
	注	柱
	註	駐
	厨	躇
	偷	鍮
	誅	蟲
チ フ	蟄	
チ ウ	冢	塚
	徵	懲
	重	澄
	寵	
テ ウ	兆	超
	朝	嘲
	潮	鳥
	蔦	凋
	調	鯛
	雕	彫
	弔	釣
	趙	肇
	耀	
テ フ	帖	貼
	喋	牒
	諜	
チ キヂ	尼	泥
	治	地
	除	賦
	直	
ジ	寺	侍
	時	特
ジキ		
ヒ ウ	氷	馮
	憑(凭)	憑
ハ フ	法	乏
ハウ		

て、今ではその假名遣も辭書に據るの他はなくなつた。

○然し數萬の漢字の音にも自ら系統がある。それを表にして記憶に便ならしめようとするのが本表の主旨である。

○假名欄は正しい假名遣を示す。

○基本字欄と系統字欄を分つたのは、一を知つて十を推さうとするのである。

○本表に示さない漢字の假名遣は、大抵末欄の普通の假名遣による。

○基本字に似て假名遣の異なる文字は大抵末欄の假名遣による。

字音假名遣一覽

中等國語讀本 新修二版 附錄

假名	基本字	系統字	普通の假名
い			
キ	韋	偉緯葦違圍幃	イ
	胃	渭蝟	
	惟	帷唯維	
	委	萎餧痿逶	
	尉	慰	
	畏	位爲威遺彙	
キ	域	閾	イキ
ツキ	鷸		イツ
ヰ	員	隕殞韻	イン
ン	院		
右ノ外スキ・ツキ・ユキ・ルキノ音ハ皆キノ假名			
え			
エ	回	廻	エ
	會	繪	
	畫	惠慧衞穢	
イエ	衞		エイ
ツエ	越	鉞	エツ
ヱ	宛	婉蜿蹠怨苑鴛	エン
ン	袁	猿轅遠園	
	援	湲媛猨	
	圓	垣寃	
ヲ	汚	汙	オ
	惡	嗚	
クヲ	屋		オク
ツヲ	越		オツ
	膃		
ヲ	温	慍	オン
	苑	褞怨	
ン	遠		
	穩	園	
お			
ア	押	鴨	アウ
オウ	嘔	謳歐毆甌鴎嫗	
	應	鷹	
ウヲ	翁	蓊	
	甕		
ワウ	王	汪往旺枉庭皇凰	
	黄	横潢	
ク ワ	禾	化花訛靴貨	カ
	和	科蝌	
	果	菓課夥顆裹	
	華	嘩譁	
	過	渦禍蝸窩	
	火	戈瓜瓦臥寡畫	
カイ	回	徊廻蛔	會
	會		會
	會		繪
お			
ア	押	鴨	アウ
オウ	嘔	謳歐毆甌鴎嫗	
	應	鷹	
ウヲ	翁	蓊	
	甕		
ワウ	王	汪往旺枉庭皇凰	
	黄	横潢	
ク ワ	禾	化花訛靴貨	カ
	和	科蝌	
	果	菓課夥顆裹	
	華	嘩譁	
	過	渦禍蝸窩	
	火	戈瓜瓦臥寡畫	
カイ	回	徊廻蛔	會
	會		會
	會		繪

假名	基本字	系統字	普通の假名
こ			
フコ	劫	刦	カウ
	業		
ウック	光	恍洸晃幌	
	黄	廣壙礦鑛曠鬢	
	皇	惶徨煌蝗篁遑	
	宏	紘閎	
	荒	慌	
	轟		
し			
フシ	習	摺慴褶	シウ
	揖	緝輯	
	拾	執集襲濕澁	
ウュシ	終	宗崇	
	螽		
	衆	聚	
し			
ウセ	小	少抄鈔肖悄消哨梢稍	シャウ
	召	硝誚銷道峭鞘宵霄	
	焦	沼招昭照詔紹韶	
	樵	礁憔譙醮蕉	
	蕭	簫嘯瀟	
	笑	燒椒	
フセ	妾	接霎	
	捷	睫	
	懾	攝囁顳	
	渉	慴葉燮	
ウョシ	松	訟頌鬆	
	升	昇陞	
	從	慫樅縱蹤聳	
	衝	腫踵鐘鍾尰	
	悚	竦	
	承	勝稱誦證	
し			
ウュシ	松	訟頌鬆	シャウ
	升	昇陞	
	從	慫樅縱蹤聳	
	衝	腫踵鐘鍾尰	
	悚	竦	
	承	勝稱誦證	
じ			
チ	持	峙痔	ジ
	治	地除膩	
	尼	泥	
キチ	直		ジキ
クチ	軸	舳	ジク
	牲	竺蚓	
ツュチ	怵		ジュツ
ヨチ	女	抒除	ジョ
			如汝恕序徐叙
クョチ	濁		ジョク
ンチ	陣	沈塵	ジン
	十	什汁	ジウ
	拾		
じ			
チ	持	峙痔	ジ
	治	地除膩	
	尼	泥	
キチ	直		ジキ
クチ	軸	舳	ジク
	牲	竺蚓	
ツュチ	怵		ジュツ
ヨチ	女	抒除	ジョ
			如汝恕序徐叙
クョチ	濁		ジョク
ンチ	陣	沈塵	ジン
	十	什汁	ジウ
	拾		

假名	基本字	系統字	普通の假名
と			
フタ	答	塔剳	タウ
	沓	踏	
	納	衲	
	榻		
ウト	東	凍棟	
	冬	咚蹇	
	豆	逗頭痘	
	同	洞恫桐胴銅筒	
	童	僮撞幢憧瞳	
	動	働慟艟董	
	讀	瀆竇	
	桶	樋	
	藤	籐謄騰	
	投	等統透偷兜彤	
に			
フニ	入		ニウ
ウュニ	柔	糅	
ウョニ	女		ニャウ
ネ	撓	繞饒遶	
ウ	尿	溺	
の			
ノウ	農	濃膿	ナウ
	能		
フナ	納	衲	
ひ			
ヘ	表	俵	ヒャウ
	票	漂標嫖縹剽瓢飄	
	苗	描猫廟	
	秒	渺	
	眇		
	謬	繆	
	孚	颱雹廟豹	
ウヒ	氷	馮	
	憑(凭)		
ほ			
ハフ	法		ハウ
	之		
フホ	法		
ウホ	朋	崩硼繃鵬	
	某	謀	
	奉	俸捧	
	峰	烽蜂鋒	
	封	幇	
	矛	蓬縫蓬	
	袤		
	牟	眸	
	鳳	剖豐貿夢	
み			
ウメ	苗	妙	ミャウ
	萌		
	棒		
	茅		

假名	基本字	系統字	普通の假名
と			
フタ	答	塔剳	タウ
	沓	踏	
	納	衲	
	榻		
ウト	東	凍棟	
	冬	咚蹇	
	豆	逗頭痘	
	同	洞恫桐胴銅筒	
	童	僮撞幢憧瞳	
	動	働慟艟董	
	讀	瀆竇	
	桶	樋	
	藤	籐謄騰	
	投	等統透偷兜彤	
に			
フニ	入		ニウ
ウュニ	柔	糅	
ウョニ	女		ニャウ
ネ	撓	繞饒遶	
ウ	尿	溺	
の			
ノウ	農	濃膿	ナウ
	能		
フナ	納	衲	
ひ			
ヘ	表	俵	ヒャウ
	票	漂標嫖縹剽瓢飄	
	苗	描猫廟	
	秒	渺	
	眇		
	謬	繆	
	孚	颱雹廟豹	
ウヒ	氷	馮	
	憑(凭)		
ほ			
ハフ	法		ハウ
	之		
フホ	法		
ウホ	朋	崩硼繃鵬	
	某	謀	
	奉	俸捧	
	峰	烽蜂鋒	
	封	幇	
	矛	蓬縫蓬	
	袤		
	牟	眸	
	鳳	剖豐貿夢	
み			
ウメ	苗	妙	ミャウ
	萌		
	棒		
	茅		

中等國語讀本 新修二版 卷四 終

こ

フカ	合甲盒匣狎鴨
ウコ	口工功攻紅肛訌汞貢鴻
	扣叩句(勾)苟拘鉤(鈎)
	后垢詬逅
	空侯洪吼(吼)閧
	倥(控)喉猴
	孔構溝(講)購(講)篝
	巨(公)恒(厚)姮(後)弘興寇肯肱薨
カウ	江巧項

き

ウキ	共供拱恭蓋
	凶兇匈恟洶胸(胷)
	恐跫(恐)蛩(恐)蛬(恐)
	興(恐)競(恐)矜(恐)凝(恐)喝(恐)
ウケ	喬蕎橋嬌嶠憍矯轎驕
	孝教
	徼竅
	堯僥澆曉磽驍翹
	叫梟
フケ	夾(叫)俠挾狹峽鋏頰莢篋蛺
	協(叫)脇(叫)脅(叫)
	劫怯
	業
キャウ	

ゆき

フキ	及給吸汲級笈岌
	急泣
ウキ	弓躬窮穹
	宮
キウ	

か

ツワク	活括刮闊
	滑猾
	月(滑)齢(滑)
クワク	郭廓槨
	畫劃
	霍(畫)擴(畫)鑊(畫)幗(畫)
カク	獲穫蠖鑊矍攫
カツ	割
カイ	海
ワク	化花訛靴貨
	禾和科蝌
	果菓課夥顆裹
	華嘩譁
	過渦禍蝸窩
	火戈瓜瓦臥寡畫
カ	
イワク	回徊廻蛔
	會檜獪膾繪鱠
	塊傀槐鬼魁
	灰恢詼
	悔晦誨
	懷壞
	快乖怪(恠)潰外
クワク	貫慣
	完(貫)莞(貫)冠(貫)浣(貫)
	玩頑翫(翫)還(翫)環(翫)換(翫)喚(翫)煥(翫)
	灌(翫)懽(翫)讙(翫)鑵(翫)罐(翫)寰(翫)
	元(翫)頑(翫)翫(翫)鑵(翫)勸(翫)歡(翫)觀(翫)驩(翫)
ンワク	丸紈
	串患
	寛款關(款)綟(款)盥(款)緩(款)願(款)卷(款)桓(款)
カン	官宦(官)管(官)菅(官)棺(官)館(官)
カツ	滑(官)猾(官)
カク	確鶴
カイ	回(海)徊(海)廻(海)蛔(海)
	會(海)檜(海)獪(海)膾(海)繪(海)鱠(海)
	塊(海)傀(海)槐(海)鬼(海)魁(海)
	灰(海)恢(海)詼(海)
	悔(海)晦(海)誨(海)
	懷(海)壞(海)
	快(海)乖(海)怪(海)潰(海)外(海)
カ	化(海)花(海)訛(海)靴(海)貨(海)
	禾(海)和(海)科(海)蝌(海)
	果(海)菓(海)課(海)夥(海)顆(海)裹(海)
	華(海)嘩(海)譁(海)
	過(海)渦(海)禍(海)蝸(海)窩(海)
	火(海)戈(海)瓜(海)瓦(海)臥(海)寡(海)畫(海)
アウ	押(海)鴨(海)凹(海)

お

ウワ	王(海)汪(海)往(海)旺(海)枉(海)庇(海)皇(海)凰(海)
	黄(海)横(海)潢(海)
ウヲ	翁(海)甕(海)
ウオ	嘔(海)謳(海)歐(海)毆(海)甌(海)鴎(海)嫗(海)
	應(海)鷹(海)
ツヲ	越(海)
	膃(海)
クヲ	屋(海)
	温(海)榲(海)苑(海)怨(海)福(海)
ンヲ	遠(海)園(海)
	穩(海)
オク	
オツ	
オン	

ち

ウチ	中仲沖忡忠衷
	注柱註駐
	厨躇鍮
	偷誅蟲
フチ	蟄
ウテ	朝嘲潮鳥蔦凋調鯛彫弔釣趙肇(釣)耀(釣)
	超貂髫
	兆佻挑眺誂跳銚窕
ウヨチ	澄(重)瀧(重)徵(重)懲(重)冢塚
フテ	貼(帖)蝶(帖)諜(帖)

そ

フサ	雑囃匝挿
ウソ	宗崇淙踪綜
	叟搜痩艘
	曾僧増憎贈繒層
	奏湊輳
	匂忽惚
	總聰
	嗽漱
	簇嗾
	藪擻
	宋(藪)叢(藪)走送
サウ	嫂
	竈(窓)

ず

ズ	受(ず)手(ず)壽(ず)誦(ず)從(ず)數(ず)
	隋(ず)隨(ず)髓(ず)
	瑞(ず)惴(ず)惴(ず)
ヅ	
ヅイ	
ヅ	
	蕊(ず)蘂(ず)

じ

ウヤチ	丈杖
	仗杖
	定(杖)掟(杖)錠(杖)
	嬢(杖)釀(杖)
	貞(杖)娘(杖)場(杖)
ウデ	溺(杖)嫋(杖)
	條(杖)條(杖)
	尿(杖)
フデ	疊(杖)帖(杖)
ウゼ	擾(杖)
ウジ	饒(杖)繞(杖)遠(杖)
	乘(杖)剩(杖)
	冗(杖)繩(杖)苔(杖)
	丞(杖)烝(杖)蒸(杖)拯(杖)
ジャウ	襄(杖)壤(杖)穰(杖)讓(杖)

じ

ウュチ	頭(杖)重(杖)住(杖)
ウュジ	從(杖)縱(杖)蹤(杖)
	充(杖)銃(杖)
	戎(杖)絨(杖)
フジ	十(杖)什(杖)汁(杖)澁(杖)拾(杖)
ジウ	
ンチ	沈(杖)陣(杖)塵(杖)
ジン	
クョチ	濁(杖)
ジョク	
ヨチ	女(杖)抒(杖)除(杖)
ジョ	如(杖)汝(杖)恕(杖)序(杖)徐(杖)叙(杖)
ツュチ	慌(杖)
ジュツ	述(杖)術(杖)
クチ	軸(杖)舳(杖)竺(杖)衄(杖)
ジク	
キチ	直(杖)
ジキ	
チ	持(杖)峙(杖)痔(杖)尼(杖)治(杖)地(杖)除(杖)膩(杖)
ジ	寺(杖)侍(杖)時(杖)

ち

ウョチ	徵(重)懲(重)澄(重)瀧(重)
	兆(重)佻(重)挑(重)眺(重)誂(重)跳(重)銚(重)窕(重)
	超(重)貂(重)髫(重)
	朝(重)嘲(重)潮(重)
	鳥(重)蔦(重)凋(重)調(重)鯛(重)雕(重)彫(重)
	弔(重)釣(重)趙(重)肇(重)耀(重)
	澄(重)瀧(重)瓏(重)隴(重)朧(重)籠(重)聾(重)
	蝶(重)諜(重)
チャウ	

ゆり

フリ	立(り)笠(り)粒(り)
ウュリ	隆(り)龍(り)
リウ	

よ

ウヨ	用(よ)傭(よ)涌(よ)蛹(よ)踊(よ)庸(よ)傭(よ)牖(よ)
	膺(よ)鷹(よ)雍(よ)擁(よ)壅(よ)
	容(よ)溶(よ)鎔(よ)蓉(よ)熔(よ)
	蠅(よ)孕(よ)癰(よ)
フエ	曄(よ)燁(よ)
	葉(よ)靨(よ)
ウエ	遙(よ)搖(よ)瑤(よ)徭(よ)謠(よ)
	要(よ)腰(よ)
	曜(よ)耀(よ)燿(よ)
	幼(よ)窈(よ)
	夭(よ)妖(よ)殀(よ)
	么(よ)杳(よ)姚(よ)窯(よ)
ヤウ	

ゆ

ウユ	熊(ゆ)雄(ゆ)融(ゆ)
	勇(ゆ)裕(ゆ)
フイ	邑(ゆ)揖(ゆ)
	悒(ゆ)
イウ	

も

ウモ	蒙(も)濛(も)朦(も)艨(も)矇(も)
マウ	

み

ウメ	苗(み)妙(み)
ミャウ	

ほ

ウホ	朋崩硼繃鵬
	某謀
	奉俸捧
	峰烽蜂鋒
	封幇
	矛(封)袤(封)
	畔(封)
	鳳(封)剖(封)豐(封)貿(封)夢(封)
	萌
	棒
	茅
フホ	法(ほ)
フハ	法(ほ)之(ほ)
ハウ	

ひ

ウヘ	表(へ)俵(へ)
	苗(へ)票(へ)漂(へ)標(へ)嫖(へ)縹(へ)剽(へ)瓢(へ)飄(へ)
	描(へ)猫(へ)廟(へ)
	秒(へ)眇(へ)渺(へ)
	謬(へ)繆(へ)
	苧(へ)飃(へ)雹(へ)廟(へ)豹(へ)
ウヒ	氷(へ)馮(へ)憑(へ)凭(へ)
ヒャウ	

ー

ウセ	小(せ)少(せ)抄(せ)鈔(せ)肖(せ)悄(せ)消(せ)哨(せ)梢(せ)稍(せ)
	召(せ)沼(せ)招(せ)昭(せ)照(せ)詔(せ)紹(せ)韶(せ)霄(せ)
	焦(せ)樵(せ)礁(せ)憔(せ)譙(せ)醮(せ)蕉(せ)
	蕭(せ)簫(せ)嘯(せ)瀟(せ)
	笑(せ)燒(せ)椒(せ)
	沙(せ)惱(せ)蕈(せ)煙(せ)葉(せ)煙(せ)
ナ	納(ー)衲(ー)

ろ

ウロ	蠟(ろ)臘(ろ)
	籠(ろ)蘢(ろ)瓏(ろ)隴(ろ)朧(ろ)籠(ろ)聾(ろ)
	僂(ろ)螻(ろ)樓(ろ)縷(ろ)鏤(ろ)髏(ろ)
	弄(ろ)哢(ろ)
	陋(ろ)漏(ろ)
フラ	蘆(ろ)
ラウ	

り

ウョリ	菱(り)龍(り)
	凌(り)陵(り)稜(り)綾(り)
ウレ	僚(り)燎(り)瞭(り)遼(り)寮(り)療(り)
	了(り)料(り)寥(り)聊(り)
フレ	獵(り)鬣(り)
リャウ	

○漢字の音も傳來の當初には支那音の通りに發音したが、時と共に變化して、今ではその假名遣も辭書に據るの他はなくなつた。

○然し數萬の漢字の音にも自ら系統がある。それを表にして記憶に便ならしめようとするのが本表の主旨である。

○假名欄は正しい假名遣を示す。

○基本字欄と系統字欄を分つたのは、一を知つて十を推さうとするのである。

○本表に示さない漢字の假名遣は、大抵末欄の普通の假名遣による。

○基本字に似て假名遣の異なる文字は大抵末欄の假名遣による。

昭和四年十月五日印刷
昭和四年十月八日發行
昭和五年十月一日訂正印刷
昭和五年十月四日訂正發行

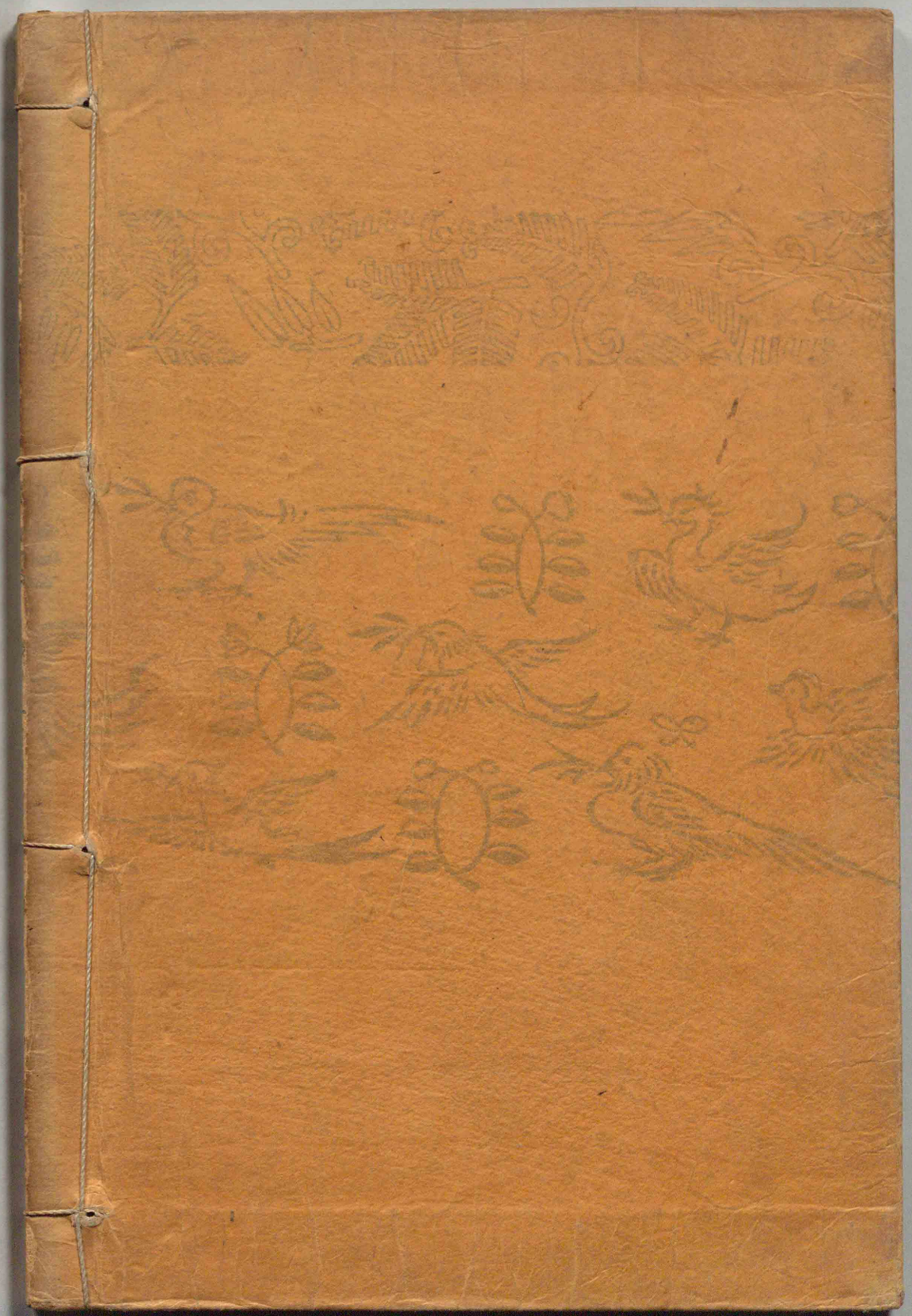
中等國語讀本（新修二版）

定價
自卷一至卷四 各金六拾四錢
卷五、六 各金六拾錢
自卷七至卷十 各金六拾壹錢

編者 落合直文
編者 金子元臣

東京市神田區錦町一丁目十番地
發行者 株式會社 明治書院
取締役社長 三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目十二番地
印刷者 細谷祐三

發行所 東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番
株式會社 明治書院
電話神田(25)二六九六番 二六九五番

不許複製